

41831

教科書文庫

4
815
41-1999
200030 2314

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

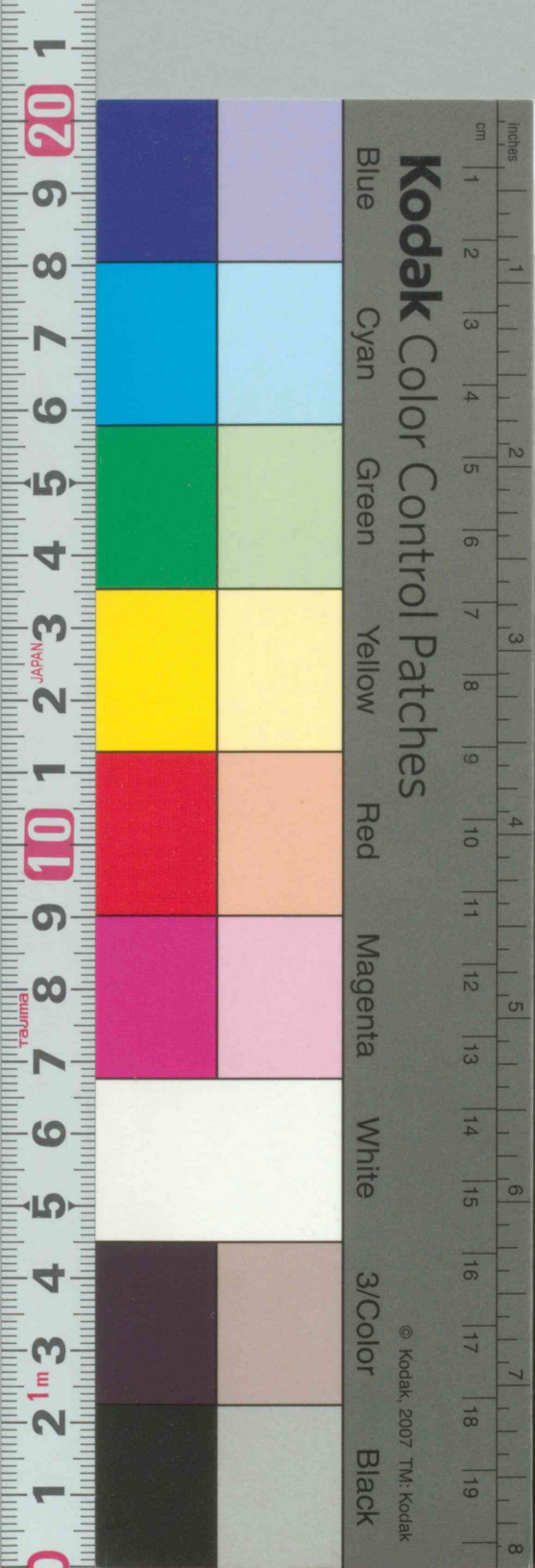


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
M014
資料室

中等文法 二

文部省

(21)



教科書文庫

4

815

41-1944

2000302314

資料室

375.9

M014

中等文法 二

文部省

広島大学図書

2000302314



目 録

一	文語とその文法……………	四
二	自立語で活用の有るもの……………	十
三	自立語で活用の無いもの……………	十三
四	附屬語で活用の有るもの……………	二十二
五	附屬語で活用の無いもの……………	二十四
六	動詞の活用(一)……………	二十六
七	動詞の活用(二)……………	三十七
八	形容詞の活用……………	五十一
九	形容動詞の活用……………	五十七
十	助動詞の接續と活用(一)……………	六十三



十一	助動詞の接續と活用(二)……………	八十一
十二	助動詞の接續と活用(三)……………	九十二
十三	助動詞の接續と活用(四)……………	百一
十四	助詞の種類と用法……………	百十六

附表

第一表	口語及び文語動詞活用表……………
第二表	口語及び文語形容詞活用表……………
第三表	口語及び文語形容動詞活用表……………
第四表	口語及び文語助動詞活用表……………
第五表	口語及び文語助動詞接續表……………
第六表	口語及び文語助詞接續表……………

一 文語とその文法

一

昭和十六年のこの日こそ、われわれ日本人が、永久に忘れることのできない日である。

この朝、私はラジオのいつもと違った聲を聞いた。さうして、「帝國陸海軍は、本八日未明、西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり。」

といふ臨時の知らせを聞いて、はつとした。

二

明治三十八年五月二十七日午前四時四十五分、わが哨艦信濃丸より、無線電信にて「敵艦見ゆ。」との報告あり。東郷司令長官は、直



ちに全軍に出動を命じ、まづ小巡洋艦をして、敵艦隊を沖島（沖島）附近にいざなひ寄せしむ。

午後一時五十五分、わが旗艦三笠は、戦闘旗をかかぐるとともに、信號旗を以て令を各艦にくだせり。いはく、

「皇國の興廢此の一戦にあり。各員一層奮勵努力せよ。」と。

〔二〕 右の第一の例文の「（かぎ）で包まれた部分の言葉は、これを他の部分のに比べると、言葉が少し違つてゐることが知られよう。次に、この「の中の言葉を、第二の例文に比べると、これらはいづれも同じ種類のものであることが知られる。

第一の例文の「」で包まれた部分以外の言葉は、口語である。これに對して、第二の例文の言葉や第一の例文の「」の中の言葉は、文語である。

〔三〕 畏れ多いことであるが、詔勅の文章は文語である。又、法令の文章や

官廳の公用文、或は諸種の記録等も、文語で書くことが多い。手紙を書く時には、いはゆる候文を用ひることが少くないが、この候文も文語の一種である。

(二) 大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

(三) 中等學校ハ皇國ノ道ニ則リテ高等普通教育又ハ實業教育ヲ施シ國民ノ鍊成ヲ爲スヲ以テ目的トス

(三) 右ノ者入學ヲ許可ス

(四) 境内ニ於イテ魚鳥ヲ捕ルベカラズ

(五) 八幡様に日參致し候も、そなたが、あつばれなるてがらを立て候やうとの心願に候。母も人間なれば、わが子にくしとはつゆ思ひ申さず。いかばかりの思ひにて、この手紙をしたためしか、よくお察しくだされたく候。

(六) 島々に灯をともしけり春の海

(七) 雪降れば山よりくだる小鳥多し障子のそとにひねもす聞ゆ

右はいづれも文語で書いたものである。

問題 1 文語の用ひられるいろ／＼の場合を考へてみよ。

このやうに、文語は、口語と共に私どもの周圍に現に行はれてゐるものである。随つて、文語を理會し、文語を書き得ることは、私どもにとつて大切なことと言はなければならぬ。

〔三〕 (一) 佛の慈悲によつて、助ける道でもあらばといふ下心であつたらう。

(三) いやしくも男と生まれた以上、萬代に傳ふべき名も立てないで、どうして空しく死なれようか。

(三) 轟然たる爆音と共に、敵艦は海上から姿を沒した。

右の文の傍線を附けた部分は、文語的な言ひ方である。このやうに、口語の文章の中に、文語的な言ひ方を混せて用ひることがある。但し、文

語の文章の中に、口語的な言ひ方を混用することは決してない。

〔四〕 文語と口語とでは、どういふ所が違ふのであらうか。

文語

口語

(一) 一度國旗を立てたるこの高地。	(一) 一度國旗を立てたこの高地。
地。 一歩もしりぞくな。 全滅すとも敵の手に渡すな。	一歩もしりぞくな。 全滅しても敵の手に渡すな。
(三) 残念なり。 多數の部下を失ひて占領したる陣地を取り返さるるか。	(三) 残念だ。 多數の部下を失つて占領した陣地を取り返されるのか。

(三) 今日、皇太子殿下の生まれ給ひし日なり。 めでたきこの日に、一身を君國にささぐるは、まことに軍人の本望なり。	(三) 今日、皇太子殿下のお生まれになつた日である。 めでたいこの日に、一身を君國にささげるのは、まことに軍人の本望である。
---	--

り

の本望である。

問題 2 右の文語の文章と口語の文章とを比べてみて、違つてゐる點を指摘せよ。

〔五〕 口語と文語との違ひは、主として文法の點にある。口語に口語の文法があるやうに、文語には文語の文法がある。前學年に於いて調べて來たのは、口語の文法である。これから文語の文法に就いて調べて行かう。

〔六〕 文語は、昔の人が文章を書く場合に用ひた言葉を承け傳へたものである。随つて、文語の文法を知つてをれば、昔の文章を讀むのに役に立つ。しかし、文語の文法と、昔の文章の文法との間には、多少違つた所もあつて全く同じではなく、又、昔の文章でも、時代や種類の違ひによつて、多少の相違がある。

〔七〕 文語に於いても、言葉は常に文として現れる。文は文節から成り、文

節は單語から成り立つ。單語はそれだけで文節となることのできる自立語と、常に自立語に附いて始めて文節となる附屬語とがある。さうして、自立語及び附屬語に、それ／＼活用の有るものと無いものがある。

問題3

(イ)〔四〕の文語の例文に就いて、これを文節に分けよ。

(ロ)更に單語に分けて、自立語と附屬語とを區別せよ。

(ハ)活用の有る語を擧げよ。

二 自立語で活用の有るもの

左折して 更に 大鳥居を 過ぎ、 神氣身に せまるを おぼえつつ、 靜かに 歩みを 移せば、 參道は また 右折す。この時、 正面 やや 遠く 拜する 南神門の けだかさ、 美しさ。玉垣に 連なる 鳥居の 奥に、 すがすがしき 赤松の 木立を 負

ひたる 樓門は、 一幅の 繪畫に 似て、 しかも 尊嚴の おもむきを そへたり。

水屋の 水に 口 すすぎて、 この 門を 入れば、 中央の 拜殿 左右の 廻廊、 庭上の 白砂、 すべて 清らかに、 嚴かなり。

〔二〕 右の文中、傍線を附けた語は、いづれも自立語であつて活用が有り、單獨で述語となることのできるものである。即ち、これらは用言である。文語の用言と口語の用言とは、活用の上でかなりの違ひがある。

〔三〕 今、右の傍線を附けた語の言ひ切りになる時の形を擧げると、次のやうになる。

左折す 過ぐ せまる おぼゆ 靜かなり 移す 右折す
遠し 拜す 連なる すがすがし 負ふ 似る そふ
すすぐ 入る 清らかなり 嚴かなり

問題1 右の文語用言は、口語ではどう言ふか。言ひ切りになる時の

形で言へ。

問題2 右の文語用言に就いて、その語が口語では、(イ)動詞であるもの、(ロ)形容詞であるもの、(ハ)形容動詞であるものを區別せよ。
問題3 (イ)の類の文語用言はどんな音で終るか。(ロ)の類、(ハ)の類はどうか。

口語で動詞に屬する語は、文語でも動詞である。文語の動詞も、口語と同様ウ段の音で終る。但し、口語動詞「ある」は、文語では「あり」であつて、これだけが例外となる。

口語で形容詞に屬する語は、文語でも形容詞である。文語の形容詞は「し」で終る。

口語で形容動詞に屬する語は、文語でも形容動詞である。文語の形容動詞は「り」で終る。

このやうに、文語でも、用言は動詞・形容詞・形容動詞の三種に分れる。さうして、これらはそれ／＼特有の活用をもつてゐる。

三 自立語で活用の無いもの

その夜 喜三右衛門は、かまのかたはらを 離れざりき。
鶏の聲を 聞きては、はや 心も 心に あらず。かまの 周圍を ぐるぐると めぐり歩きぬ。

夜は、やうやく 明けはなれたり。胸を をどらせつつ、やを にかまを 開かんとすれば、今しも 朝日 はなやかに さし 出でて、かま場を 照らせり。

一つ また 一つ、血走る 眼に 見つめつつ、かまより 血を 取り出しゐたる かれは、やがて おおと力 ある 聲に 叫びて、立ちあがりぬ。

ああ、多年の 苦心は、つひに 報いられたり。かれは、一枚の

皿を 兩手に ささげて、しばし、かま場に こをどりしぬ。

喜三右衛門は、やがて 名を 柿右衛門と 改めたり。

〔二〕 右の文中、傍線を附けた語は、いづれも自立語であつて活用の無いものである。活用の無い自立語は、文語と口語とで用ひる單語に違ひがあるが、文法上の性質は大體同様である。

問題1 口語では、活用の無い自立語にどんな種類があるか。

〔三〕 敵艦 見ゆ。

神氣 身に せまる。

問題2 右の文を口語に改め、文語と口語とでどんな點が違ふか言へ。

問題3 口語では、主語にどういふ助詞を用ひるか。

右の文で、「見ゆ」「せまる」はそれ／＼述語である。これに對する主語は「敵艦」「神氣」である。即ち、文語では、口語の場合のやうに、「が」などの助詞を伴なつて主語となるとは限らず、助詞を伴はないで主語となる

ことも少くない。「敵艦」「神氣」はこのやうに主語として用ひられるから、體言即ち名詞である。體言は「を」「に」「へ」等の助詞をとることができ

る。

問題4 この章の初めの例文中から體言を抜き出せ。

〔三〕 「その夜」の「その」は、口語では、いつも「その」といふ形でしか用ひられな

いので、これを一つの單語と認め、連體詞とする。ところが文語では、

そは 柿右衛門の 作りし 皿なり。

そを 賜はりたし。

のやうな言ひ方がある。故に「そ」だけを一つの單語と認め、それに「の」「は」「を」等の助詞が附くと考へなければならぬ。同様に、口語連體詞の「この」「わが」なども、文語では「こ」「わ」に「の」「が」が附いたものと見なければならぬ。さうして、「そ」「こ」「わ」などは、「が」「の」などの助詞を伴なつて主語として用ひられるから、これらも體言である。

〔四〕 體言にいろいろの種類の あることは、口語の場合と同様である。

問題5 口語では、體言にどんな種類があるか。

〔五〕 文語で普通に用ひる代名詞は次の通りである。

わわれ	われ	われ	われ	自稱	
おのれ	なれ	なれ	なれ	對稱	
	なんぢ				
ここ	ここ	ここ	ここ	近稱	他稱
こなた	ここ	これ	これ	中稱	
そなた	そこ	そそ	そそ	遠稱	不定稱
あなち	かしこ	かかれ	かかれ	稱	
あなた	いづく	いづく	いづく		
なた	いづか	いづか	いづか		
方角	場所	事物	人		

問題6 以上のほか、文語にどんな代名詞があるか考へてみよ。

問題7 例文中の體言を、普通名詞・固有名詞・數詞・代名詞に分けよ。

〔六〕 主語とならないものの中には、それだけで修飾語として用ひられるものがある。さうして、その中に、用言を修飾するもの即ち副詞と、體言を修飾するもの即ち連體詞とがある。

問題8 この章の初めの例文中から副詞を抜き出せ。さうして、一々の副詞がどの語を修飾してゐるかを示せ。

〔七〕 副詞は用言を修飾するばかりでなく、(一)他の副詞を修飾したり、(二)或る種の體言を修飾したりすることがある。

(一)なほ。しばし。試みよ。

(二)日はや。西に。傾けり。

(三)一人にて。成し遂げたり。

これは、程度を表す副詞に限つて見られるものである。

〔八〕 又、或る種の副詞は、これを受ける語に一定の言ひ方を要求する。

汝須らく兵法を學ぶべし。
まさに壯途につかむとす。
われあに勞を惜しまむや。
いづくんぞ二朝に仕へむや。
よも知らじ。

必ずしも反對するものにあらず。
用意をさく／＼怠りなし。

砲聲は恰も百雷の一時に落つるがごとし。

千木のほとりを飛ぶ鳩のさながら雀のごとく見ゆ。
なにとぞ御來臨なし下されたく候。

〔九〕 文語で連體詞と認められるものは、或る「あらゆる」「いはゆる」などである。

〔一〇〕 活用の無い自立語で主語にならないものの中には、修飾語にもならず、専ら獨立語として用ひられるものがある。これには、前の言葉を受けて後に結びつける役目をするもの即ち接續詞と、他の文節とは餘り關係がなく、比較的獨立して用ひられるもの即ち感動詞とがある。感動詞は、それだけで言ひ切りになつて、一つの文をなすことが少くない。
問題 9 この章の初めの例文中から接續詞を抜き出せ。又、感動詞を抜き出せ。

〔一一〕 かれの私財は既に盡きたり。しかもこの救濟事業は中止すべきにあらず。よつてあまねく世人に訴へて寄附を募らむとせり。
日 既に暮れぬ。されど宿るべきところもなし。
將軍は軍人にして且つ教育家なり。
京都及び奈良は日本の舊都なり。
これらはいづれも接續詞である。文語で普通に用ひる接續詞には、な

ほ次のやうなものがある。

さらば されば かくて 随つて 藤田鶴呆 理
 或は 又は もしくは 摩
 但し もつとも さはれ 然れども 然るに 制限 文法
 並びに 又 異字加筆列

問題10 次の傍線を附けた語は、副詞か接續詞か。副詞の場合には、何を修飾するかを示せ。

- (甲) 昨日 渡りし 河の 上流を、今日 又 越ゆ。
- (乙) 進んで 河を 渡り、また 山を 越ゆ。
- (甲) 八合目より 九合目までの 道は もつとも けはし。
- (乙) 山道は 頗る 急なり。もつとも 中腹までは 馬背の 便あり。
- (甲) かれの 言、或は 真ならむ。
- (乙) 當時の 青年は、劍道 或は 柔道に 熱心なりき。

(甲) 期限までには なほ 三日 あり。
 (乙) 本日の 議會は 五時に 終れり。なほ 明日より 休會に 入る。

三三

あつばれ、名馬。誰の馬ぞ。
 いな、われらが 知る ところに ならず。
 いで、大船を 乗り出して、われは 拾はむ、海の 富。
 やよ、正行、汝は 父の 教訓を 忘れたるか。
 すは、伏兵の ありけるぞ。汝ら 速かに これを 撃ち拂ふべし。
 これらはいづれも感動詞である。文語で普通に用ひる感動詞には、なほ次のやうなものがある。

あゝ あはれ あな あはや
 いざ や いかにおう

問題11 次の文から副詞接續詞感動詞を抜き出せ。副詞は何を修飾するかを示せ。

副詞
接續詞×
感動詞△

(一)一切経は、佛教に關する書籍を集めたる一大叢書にして、この教へに志ある者の無二の寶として尊ぶところなり。しかもその巻數幾千の多きにのぼり、これが出版は決して容易の業にあらす。されば古は、支那より渡來せるものの僅かに、世に存するのみにて、學者その得難きに苦しみたりき。

(二)鐵眼大いに喜び、まさに出版に着手せむとす。たまぐ大阪に出水あり。死傷頗る多く、家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らす。

(三)あないとほし。このあかつき、城の内にて管絃したまひつるは、この人々にておはしけり。やさしかりける人々かな。

四 附屬語で活用の有るもの

樺太は 島なりや、又 大陸の 一部なりや、世界の 人の 久しく疑問とする ところなりしが、その 實地を 探検して、これが 解決を 與へたるは、實に わが 間宮林藏なり。

文化五年 四月、林藏は 幕府の 命に よりて、松田傳十郎と共に 樺太に 渡り、海岸を 探りて ぼゞ 島なる ことを 知りぬ。されど、なほ 心に 満たざるもの あり、同年 七月、單身にて 又 樺太に おもむけり。

先づ 樺太の 南端なる 自主にて 土人を やとひ、小舟に 乗りて 北に 進む。途中の 困難 名狀すべからず。

〔一〕 右の文中、傍線を附けた語は、附屬語であつて活用の有るもの、即ち助動詞である。

問題 1 右の例文中の一々の助動詞に就いて、それらがどんな品詞に附いてゐるか、調べてみよ。

〔二〕 助動詞は、右の例文で知られるやうに、動詞や他の助動詞に附いてい

ろいろの意味を加へる。又例文中の「なり」や、
 軍勢 四方より 集る。正行 その 將たり。
 往事を 思へば 夢のごとし。
 の「たり」「ごとし」のやうに、直接に、又は「を」を介して體言に付き、その文節
 を述語とする働きをなすものもある。

五 附屬語で活用の無いもの

春は 島 山 霞に 包まれて 眠るがごとく、夏は 山海皆
 緑にして 目ざむるばかり 鮮かなり。兩岸 及び 島々、見渡す
 限り 田園 よく 開けて、まうせんを 敷けるがごとく、白壁の
 民家 その 間に 點在す。

海の 静かなる ことは 鏡のごとく、朝日 夕日を 負ひて
 島がくれ行く 白帆の 影も のどかなり。月影の さゞ波に 碎
 け、漁火の 波間に 出沒する 夜景も また 一段の おもむき
 あり。

〔二〕 右の文中、傍線を附けた語は、附屬語であつて活用の無いもの、即ち助
 詞である。

問題1 例文中の一々の助詞に就いて、それらがどんな品詞に附いて
 ゐるか、調べてみよ。

〔三〕 助詞は、右のやうに、他の語に附いて、その語と他の語との關係を示し、
 又はこれに或る意味を添へる語である。

〔三〕 以上のやうに、文語に於いても、口語と同じだけの品詞が認められる。
 問題2 文語にどんな品詞があるか、以上調べて來たことに基づい
 て、品詞分類の表を作れ。

六 動詞の活用(二)

〔一〕 問題I 口語で「打つ」「着る」はどう活用するか。その活用形は幾つあるか。

口語の「打つ」「着る」が、文語ではどう活用するかといふと、

(一) 打たず。 打たむ。 着ず。 着む。

(二) 打ちたり。 着たり。

(三) 打つ。 着る。

(四) 打つ時。 着る人。

(五) 打てども。 着れども。

(六) 打て。 着よ。

即ち、文語でも口語と同様動詞の活用には六つの場合がある。

(一)の「打た」「着」は、口語の「ない」に當る「ず」「む」「よ」に當る「む(ん)」に連なる形である。これを口語の場合と同様、未然形といふ。

(二)の「打ち」「着」は「たり」に連なるほか、「て」「き」「けり」などに連なる形である。これを連用形といふ。

(三)の「打つ」「着る」は言ひ切る場合に用ひる形で、これを終止形といふ。(四)の「打つ」「着る」は「時」「事」「所」「物」「人」など、各種の體言に連なる形で、これを連體形といふ。

(五)の「打て」「着れ」は「ども」「ど」に連なり、又「ば」に連なつて、既にさうであるといふ意味を表す形である。文語ではこの形を已然形といふ。

打てども。 響かず。

打てば。 響く。

口語の「打てば。響かう。」のやうな假定を表す言ひ方は、文語では未然形に「ば」を付けて言ふ。

打たば。 響かむ。

(六)の「打て」「着よ」は命令の意味を表すために用ひる形で、これを命令形といふ。

問題2 文語動詞と口語動詞とで、その活用形にどんな違いがあるか。
〔二〕 文語に於いても、動詞の活用に幾つかの種類がある。

問題3 口語ではどんな種類があるか。
〔三〕 今、口語で四段に活用する動詞「讀む」に就いて、その文語に於ける活用を調べてみると、次の通りである。

少しも 書を 讀まず。

萬卷の 書を 讀みたり。

古事記を 讀む。

書を 讀む 時は 姿勢を 正しくすべし。

終日 書を 讀めども、なほ 飽く ところを 知らず。

速かに 讀め。

問題4 右にならつて、「書く」を活用させてみよ。

問題5 「讀む」「書く」の活用を表に作れ。

基本の形	語 幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
讀む	よ (讀)						
書く	か (書)						
主な用法		ズなるに	タリなるに	言切るひ	「時」連なるに	ドモなるに	命令の意味で言ひ切る

問題6 この活用を口語の「讀む」「書く」の活用と比べてみよ。

このやうな活用を、文語でも四段活用といふ。ア イ ウ エ

問題7 次の語は、いづれも文語に於いて四段に活用する動詞である。活用させてみよ。

動く 漕ぐ 示す 討つ 救ふ 學ぶ 望む 祈る

問題8 右の語は、口語では何活用に屬するか。

○文語四段活用の動詞は、カ・ガ・サ・タ・ハ・バ・マ・ラの各行にある。

〔四〕 口語で四段に活用する「死ぬ」は、文語では次のやうに活用する。

大君の 御楯と なりて われ 死なむ。

その 人 はやく 死にたり。

朝あしたに 生まれ 夕べに 死ぬ。

今ぞ 死ぬる 時と 思へば、心にかゝる ことなし。

身は 死ぬれども 名は 後の 世に 残り。

國の ために 死ぬ。

問題9 「死ぬ」の活用を表に作れ。

基本の形	語 幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
死ぬ	シ	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌル	ヌ
主な用法		連なるに	連なるに	切言	連なるに	連なるに	命令の意味で言ひ切る

問題10 口語の「死ぬ」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。又、文語動

詞「読む」「書く」の活用と比べてみよ。

問題11 四段活用の動詞、例へば「読む」といふ語に於いては、終止形と連體形は共に「読む」であり、已然形と命令形は共に「読め」である。文語動詞「死ぬ」の諸活用形に於いて、語尾の形の同じものがあるか。

問題12 文語動詞「死ぬ」は、五十音圖のどの行に活用するか。

このやうな活用をナ行變格活用(ナ變)といふ。この活用に屬する動詞は、右の「死ぬ」を除くと、古く用ひられたものとして「往いぬ」があるだけである。
カガサタハバマラ 行變格

〔五〕 口語で四段に活用する「ある」は、文語では次のやうに活用する。

魂 天外に 飛び、心 ここに あらず。

顔回と いふ 者 ありき。

ここに 昔の 關あ と あり。
 備へ ある ところ 憂ひ なし。
 備へは あれども、なほ 心を ゆるむる こと なかれ。
 皇國に 榮え あれ。

問題13 「あり」の活用を表に作れ。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
あり	ア	ラ	リ	リ	ル	レ	ル
主な用法		ズなるに 連なるに	クリなるに 連なるに	言ひ切る	「侍」 連なるに	ドモなるに 連なるに	命令の意味 で言ひ切る

ラ行二変格

問題14 終止形はどんな音で終つてゐるか。

問題15 口語の「ある」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。又、文語動

詞「讀む」「書く」の活用と比べてみよ。

問題16 文語動詞「あり」は、五十音圖のどの行に活用するか。

このやうな活用をラ行變格活用(ラ變といふ。この活用に屬する動詞は、「あり」のほか「居り」がある。又、古く用ひられたものとして「侍り」がある。

問題17 「居り」「侍り」を活用させてみよ。

問題18 口語動詞「居る」はどう活用するか。

〔六〕 口語で四段に活用する「蹴る」は、文語では次のやうに活用する。

球を 蹴ず。
 球を 蹴たり。
 球を 蹴る。
 蹴る 時は 勢よく 蹴るべし。
 蹴れども 遠く 飛ばず。
 早く 蹴よ。

問題19 「蹴る」の活用を表に作れ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
蹴る			る	り	れ	れ
主な用法	ズなるに	タリなるに	言ひ切る	「時」に連なるに	ドモに連なるに	命令の意味で言ひ切る

○この動詞は語幹と活用語尾との區別がつかない。

問題 20 口語の「蹴る」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。又文語動

詞「讀む」「書く」の活用と比べてみよ。 同

問題 21 この活用を口語下一段活用の動詞「受ける」「捨てる」の活用と比べてみよ。

問題 22 文語動詞「蹴る」は、五十音圖のどの行に活用するか。

このやうな活用を下一段活用といふ。

〔ナ〕 口語で下一段に活用する「攻める」は、文語では次のやうに活用する。

滿を持して 未だ、攻めず。

忽ち その 城を 攻めたり。

急に 敵軍を 攻む。

攻むる 者 守る 者、今を 限りと 戦ふ。

攻むれども 俄かには 落ちず。

一氣に 攻めよ。

問題 23 「攻む」の活用を表に作れ。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
攻む		め	む	む	む	むれ	めよ
主な用法		ズなるに	タリなるに	言ひ切る	「時」に連なるに	ドモに連なるに	命令の意味で言ひ切る

問題 24 口語の「攻める」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。

このやうな活用を下一段活用といふ。

問題 25 次の文語動詞は下二段に活用する。一々活用させてみよ。

助く 平ぐ 失す 混す 企つ 撫づ 連ぬ 興ふ 調ぶ
認む 越ゆ 恐る 植う

問題26 右の動詞は、口語ではどんなに活用するか。

問題27 口語下一段活用の動詞「得る」「出る」「寝る」「経る」は、文語では、「得」「出づ」「寝ぬ」「経ぬ」である。これらはいづれも下二段に活用する。活用させてみよ。又、これらはどの行に活用するか。

問題28 口語下一段活用の動詞「覚える」「聞える」「絶える」「見える」などは、文語では下二段に活用する。どの行に活用するか。

○ア行下二段活用の動詞は「得」「心得」だけである。

○ワ行下二段活用の動詞は「植う」「飢う」「据う」の三語である。

○その他の「エ」「ウ」「ウル」「ウレ」「エヨ」と發音するものはすべてハ行に活用する動詞である。

問題29 口語で下一段に活用する動詞は、文語ではどんなに活用するか。

問題30 文語で下一段に活用する動詞には、どんなものがあるか。
○文語下二段活用の動詞は、五十音圖の各行とガザダバの各行とにある。

七 動詞の活用(二)

〔ハ〕 口語で上一段に活用する「見る」は、文語では次のやうに活用する。

未だ 敵影を 見_ず。

前方に 敵影を 見_{たり}。

遙か 前方を 見_る。

詳細に 見_る 時は、その 誤りなる ことを 發見すべし。

見_{れども} 見_{えず}。

注意して 見_よ。

問題31 「見る」の活用を表に作れ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
見る						
主な用法	連ズなるに	連クリなるに	切言るひ	連「時」なるに	連ドモなるに	命令の意味で言ひ切る

○この動詞は語幹と活用語尾との區別がつかない。

問題32 口語動詞「見る」の活用と比べてみよ。

このやうな活用を、文語でも上一段活用といふ。

問題33 次の語は文語でも上一段に活用する。一々活用させてみよ、

着る 似る 煮る 干る 願みる 試みる 射る 鑄る 居る
率ゐる

○文語上一段活用の動詞は、カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワの各行にある。

〔九〕 口語で上一段に活用する「伸びる」は、文語では次のやうに活用する。

當時 國力 未だ 伸びず。

今や 國力 大いに 伸びたり。

國力 日々に 伸び。

今や 盛んに 伸びる 時なり。

わが たけ かく 伸びれども 兄には 及ばず。

すくくと 伸びよ。

問題34 「伸び」の活用を表に作れ。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
伸び							
主な用法		連ズなるに	連クリなるに	切言るひ	連「時」なるに	連ドモなるに	命令の意味で言ひ切る

問題35 口語動詞「伸びる」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。又、文

語動詞「見る」の活用と比べてみよ。

このやうな活用を上一段活用といふ。

問題 36 次の文語動詞は上二段に活用する。一々活用させてみよ。

起く 過ぐ 落つ 閉づ 用ふ 亡ぶ 恨む 報ゆ 下る

○ヤ行上二段活用の動詞は「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」の三語である。

○文語上二段活用の動詞はカ・ガ・タ・ダ・ハ・バ・マ・ヤ・ラの各行にある。

○「用ふ」は又、ワ行上一段にも活用する。

○上一段活用の「試みる」は又、上二段に活用することもある。

〔10〕

口語カ行變格活用の動詞「くる(來)」は、文語では次のやうに活用する。

人も 尋ねては こそ。

少年 一人 きたり。

人 ぐ。

人の 尋ねて くる こと なし。

春は くれども 花 咲かず。

春よ、 とく ことよ。

問題 37 「く」の活用を表に作れ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
く						
主な用法	ズ 連なるに	タ 連なるに	言 切るひ	「時」 連なるに	ド 連なるに	命令の意味 で言ひ切る

○この動詞は語幹と活用語尾との區別がつかない。

問題 38 口語の「くる」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。

問題 39 文語動詞「く」はどの行に活用するか。

このやうな活用を、文語でもカ行變格活用(カ變)といふ。この活用に屬する動詞は「く」だけである。

問題 40 「く」と同じ意味を表す文語動詞に「來たる」がある。この動詞

はどう活用するか。

波に たゞよふ 氷山も、 來たらば 來たれ、 恐れむや。

〔二〕

口語サ行變格活用の動詞「する」は、文語では次のやうに活用する。

照りも せず、降りも せず。

今日 一日 讀書を したり。

艱難 汝を 玉に す。

する 事 なくて 日は 過ぎぬ。

世の ために すれども、世人 その 眞意を 知らず。

汝 怠らず 仕事を せよ。

問題 41 「す」の活用を表に作れ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
す						
主な用法	ズ 連なるに	ク 連なるに	言 切る	「時」 連なるに	ドモ 連なるに	命令の意味 で言ひ切る

○この動詞は語幹と活用語尾との區別がつかない。

問題 42 口語の「する」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。

問題 43 文語動詞「す」は、どの行に活用するか。

このやうな活用を、文語でもサ行變格活用(サ變)といふ。この活用に屬する本來の動詞は「す」だけであるが、この「す」は名詞等と合して多くのサ變複合動詞を作る。

罪^{つみ}す 與^よす 嘉^{よみ}す 輕^{かろ}んず 甘^{あま}んず 疎^そんず 先^まんず

全^まうす 忝^{かたじけな}うす 製^{つく}す 譯^{やく}す 命^{いのち}ず 論^{ろん}ず 生^なず 轟^{とどろ}沈^{しず}す

擊滅^{きくめつ}す

問題 44 右のサ變動詞を活用させてみよ。

問題 45 「死ぬ」と同じ意味を表す文語動詞に「死す」がある。これもサ

變に活用する。活用させてみよ。

志 成らずば 死すとも 歸らじ。

問題 46 「す」と同じ意味を表す文語動詞に「なす」がある。「なす」はどう

活用するか。

〔三〕

文語動詞の活用の種類は、右に挙げた通りである。

問題47 文語動詞の活用にはどんな種類があるか。口語動詞ではどうか。

問題48 文語動詞と口語動詞との活用の種類を対照してみると、その間にどんな関係が見られるか。

問題49 文語動詞の各の種類から代表的な語を挙げて、これに打消の「ず」を付けてみよ。五十音圖のどの段の音から「ず」に続くか。

問題50 下一段活用及びカ變に屬する動詞は、たゞ一語づつである。サ變に屬するものも、複合動詞の場合を除けばたゞ一語である。ナ變・ラ變に屬するものも極めて少い。上一段活用に屬する動詞もさほど多くない。これらを一々挙げてみよ。

問題51 以上を除けば、動詞は、四段活用か、上二段活用か、下二段活用かに屬する。四段か上二段か下二段かを簡単に見分ける方法を考へてみよ。

〔三〕

文語動詞にも音便の形がある。

問題52 (イ)口語動詞には幾種類の音便の形があるか。

(ロ)音便の形のある動詞は何活用の動詞か。

(ハ)どういふ場合に音便の形が見られるか。

文語では、主として、四段・ナ變・ラ變の動詞が助詞「て」に連なる時に現れる。しかし、口語と違って、「て」に連なる場合にいつでも音便の形が用ひられるといふのではない。さうして、口語の場合と比べると、その種類が一つ多くなつてゐる。

一 語尾がイとなるもの(イ音便)——カ行四段のキ、ガ行四段のギから。(ガ行の時は、「て」は「で」となる。)

二 語尾がウとなるもの(ウ音便)——ハ行四段のヒから。

三 語尾がンとなるもの(撥音便)——バ行四段のビ、マ行四段のミ、ナ變のニから。(この場合、「て」は「で」となる。)

四 語尾が促音となるもの(促音便)——タ行四段のチ、ハ行四段のヒ、ラ行四段のリ、ラ變のリから。

問題53 右の四種類各の實例を考へてみよ。

〔二四〕 口語では例へば「泳ぐ」に對して「泳ぐことができる」の意の「泳げる」といふ動詞があるやうに、四段活用の動詞には、これに對する可能動詞がある。しかし文語には、このやうな言ひ方はない。

〔二五〕 (一)戸 おのづからあく。 戸をあく。

(二)疑ひ おのづから解く。 疑ひを解く。

(三)廣場に集む。 人を集む。

(四)子犬生まる。 犬子を産む。

(五)名現る。 名を現す。

(六)水流る。 水を流す。

(七)花はらくと散る。 花を散らす。

人起く。 人を起す。

湯沸く。 湯を沸かす。

問題54 右の動詞の活用を調べよ。

このやうに、文語に於いても、語幹の同じ動詞の間に、活用が違ふに従つて、その動作や作用を、(一)それ自身だけの働きとして表すものと、(二)他に對する働きかけ、又は他を作り出す働きとして表すものと、この二種類がある。

又、その表す意味は違ふが、活用の同じものもある。

風吹く。 火を吹く。

川水増す。 池の水を増す。

地碎く。 身を碎く。

〔二六〕 文語動詞の連用形が中止法として用ひられることは、口語と同様である。

風 叫び、海 怒る。

〔二七〕 文語動詞の連體形及び已然形は、次のやうに、文の終りに用ひられることがある。

(一) 花の 香ぞ。する。

これも 勇士の 一人になむ。ある

月や。出づる。

誰をか。尋ぬる。

(三) 春をこそ。待て。

月こそ。出づれ。

即ち、或る一定の助詞を受けて動詞で文を終止する時に、或は連體形で、或は已然形で、言ひ切りにするのである。

問題 55 どういふ場合に連體形が用ひられ、どういふ場合に已然形が用ひられるか。右の例文によつて考へてみよ。

問題 56 次の漢字を口語と文語との動詞に用ひて、その活用の仕方を比べてみよ。

觸 <small>ふ</small>	蹴 <small>け</small>	老 <small>お</small>	据 <small>す</small>	殖 <small>ふ</small>	換 <small>か</small>	下 <small>お</small>	怖 <small>お</small>	生 <small>は</small>	絶 <small>た</small>	並 <small>な</small>
攀 <small>か</small>	悔 <small>く</small>	堪 <small>た</small>								

問題 57 次の文の傍線を附けた動詞の活用の種類を考へよ。

(一) 紫式部は 幼き 頃より 物覺えよく、兄の 書を 讀むを 聞き
 ゐて、直ちに これを そらんじ、少しも 忘るる こと なかり
 しかば、父の 爲時は 常に その 頭を 撫でて、「汝の 男と 生
 まれざりしが 口惜し。」と 言ひたりとぞ。 夫に 別れて 後、宮
 中に 召されて、上東門院に 漢文 漢詩を 教へ まるらせたり。

(三) 寺門を出で、苔むしたる坂道をくだりて、那智の瀧の正面に立つ。

仰げば、百數十米の中空より落ち来る瀧、初めは水筋通りて見ゆれども、岩に當り石に碎け、下は漠々として雲のごとく、綿のごとく、美觀言語に盡くし難し。

問題 58 次の文に誤りがあつたら正せ。

- (一) 若き時學ばずば老ひて悔うる時あるべし。
- (二) 國家の榮へんことを願ひて、絶へず産業を奨勵せり。
- (三) みづから深くその誤りを恥じて、再び人に教ゆるを欲せず。
- (四) 鹿追う獵師は山を見ず、飢えたる者は食を選ばず。
- (五) 敵攻め寄すとも、城門を閉じて、決して出することなかれ。
- (六) 勇むで家を出でたり。
- (七) 重荷を負ふて坂を登る。
- (八) 凡そ王士にはらまれて忠をいたし、命を捨てるは、人臣の道なり。
- (九) 試みに數匹の馬を追ひ落したるに、ころびて倒れるもあり、足を折りて死ぬもあり。

八 形容詞の活用

〔一〕 問題 1 口語の形容詞はどんなに活用するか。又どんな活用形があるか。

今、口語形容詞「よい」が、文語ではどう活用するかを調べてみると、次の通りである。

- (一) 月 よくば 共に 眺めむ。
- (二) 今宵は 月 よからず。
- (三) 雲 はれ行きて 月 も よく なりぬ。
- (四) 月 いと よかりき。
- (五) 月 よし、夜 よし、水 も よし。
- (六) 秋は 月 よき 時なり。
- (七) 今宵の 月は よかるべし。

(八月)は よけれども 風や、寒し。
 (五夜)も よかれ、月も よかれ。
 これを文語の動詞の場合に準じてまとめると、次のやうに六つの活用形が立てられる。

(一)及び(二)は、共に「ば」に連なつて假定の意味を表す形である。又(二)は、「む(ん)」「ず」に連なる。故にこの(一)と(二)とを合はせて未然形といふ。
 (三)は、「なる」等の用言に連なる形(四)は、「き」「けり」等に連なる形である。故にこの(三)と(四)とを合はせて連用形といふ。

(五)は、言ひ切りに用ひる形である。故に終止形といふ。

(六)は、「時」「事」「所」「物」「人」など各種の體言に連なる形であるから、連體形といふ。(七)は、「べし」などに連なる形であるが、これも連體形とする。

(八)は、「ど」「ども」に連なり、又「ば」に連なつて、既にさうであるといふ意味を表す形である。故に已然形といふ。

(九)は、命令の意味を表す形である。故に命令形といふ。

問題2 右にならつて、「高い」「新しい」の文語に於ける活用を調べてみよう。

〔三〕 右の「よし」の活用を表にまとめると、次のやうになる。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
よし	よ	い ^く から	い ^く かり	い ^し	い ^き かる	い ^け れ	い ^か れ
主な用法		バ・ズに連なる	ナル・キに連なる	切言	時・ベシに連なる	ドモに連なる	命令の意味で言ひ切る

問題3 口語形容詞「よい」の活用と比べてみよう。どこが違ふか。

問題4 次の語は「よし」と同じやうに活用する。活用させてみよう。

- 赤し 青し 白し 強し 弱し 廣し 狭し 清し 暗し
- 幼し 無し

〔三〕 次に、口語形容詞「正しい」の文語に於ける活用を調べてみると、次の

通りである。

正しくば 何か 恐れむ。

いづれか 正しからむ。

その 心も 次第に 正しく なりぬ。

君は 正しかりき。

心 極めて 正し。

心 正しき 人なりき。

常に 正しかるべし。

言 正しけれども 世に 用ひられず。

君よ、 正しかれ。

問題5 「正し」の活用を表に作れ。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
正し	ただ(正)	シ	シ	シ	シキ	ケレ	カレ
主な用法		バ・ズに連なる	ナル・キに連なる	言ひ切る	時・ベシに連なる	ドモに連なる	命令の意味で言ひ切る

問題6 口語形容詞「正しい」の活用と比べてみよ。どこが違ふか。

問題7 「よし」の活用と比べて違ふ點はないか。

問題8 次の語は「正し」と同じやうに活用する。活用させてみよ。

勇まし 嬉し 苦し 樂し 激し 久し 惜し 珍し 美し

詳し 涼し

問題9 口語形容動詞「同じだ」に當るものは、文語では「同じ」であつて、

形容詞に屬する。「同じ」を活用させてみよ。「正し」と比べると、ど

こが違ふか。

〔四〕 「よし」のやうな活用をク活用、「正し」のやうな活用をシク活用といふ。

文語の形容詞の活用には、この二種類がある。

〔五〕 形容詞にも音便の形がある。主として、連用形のうち「く」「しく」の形が他の用言に連なる時と、連體形のうち「き」「しき」の形が助詞「かな」に連なる時に現れる。前者はウ音便に、後者はイ音便になる。

雨 ひとしきり 強う 降る。

何 着ても 美しう なる 月見かな。
 よいかな。 悲しいかな。
 〔六〕 形容詞の連用形のうち、「く」「しく」の形は、用言を修飾するのに用ひられる。

天 よく 晴れたり。
 正しく 讀む。

又「く」「しく」の形は、中止法としても用ひられる。

風 強く、波 高し。

夏は 涼しく、冬は 暖かなり。

〔七〕 連體形のうち、「き」「しき」の形及び已然形は、動詞の場合と同様或る一定の助詞を受けて文を終止する時に用ひられる。

〔一〕 うらみぞ。 深き。
 心なむ。 正しき。

風や。 強き。

などか。 苦しき。

〔三〕 月こそ。 よけれ。

祝ふ。 今日こそ。 楽しけれ。

九 形容動詞の活用

〔一〕 今、口語形容動詞「静かだ」が、文語ではどう活用するか調べてみると、次の通りである。

〔二〕 風 静かならず。 海上も 静かならむ。

〔三〕 海 いと 静かなりき。

〔四〕 波 いと 静かになる。

〔五〕 天 よく 晴れて、海 いと 静かなり。

〔六〕 波 静かなる 時 あり。

(六)夜は 静かなれども、なほ 眠る こと かたし。
(七)今宵 一夜は 静かなれ。

問題1 右にならつて、「壯烈なり」の活用の仕方を調べてみよ。

このやうに、文語形容動詞には、七つの違つた形が見られるが、動詞の場合に準じてまとめると、右のうちの(二)と(三)とが一つの活用形となり、結局、動詞及び形容詞の場合と同様に、六つの活用形が立てられる。

(三) 「静かなり」「壯烈なり」の活用を表にまとめると、次の通りである。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
静かなり	静か	静かなら	静かなり	静かなり	静かなり	静かなり	静かなり
壯烈なり	壯烈	壯烈なら	壯烈なり	壯烈なり	壯烈なり	壯烈なり	壯烈なり
主な用法		ズ連なるに	キ・ナルに連なる	言ひ切る	「時」に連なる	ドモに連なる	命令の意味で言ひ切る

問題2 口語形容動詞「静かだ」の活用と比べてみよ。

問題3 次の語は、「静かなり」「壯烈なり」と同じやうに活用する。活用

させてみよ。

鮮かなり 穩かなり 盛んなり 巧みなり 懇切なり 丁寧なり
嚴かなり 速かなり 嚴重なり のどかなり 遙かなり 異なり

(三) 文語に「堂々たり」といふ語がある。その活用は次の通りである。

その 態度 甚だ 堂々たらず。

態度は 常に 堂々たりき。

わが 軍 堂々と 進駐す。

威風 堂々たり。

堂々たる 威容を 示す。

態度 堂々たれば、その 威に 服せざる 者なし。

常に 堂々たれ。

問題4 「堂々たり」の活用を表に作れ。

基本の形	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
堂々たり	堂々	「タラ	「タリ	「タリ	「タレ	「タレ	「タレ
主な用法		連なるに	キナルに連なる	言ひ切る	「時」に連なる	ドモに連なる	命令の意味で言ひ切る

問題5 「静かなり」の活用と比べてみよ。どんな共通点があるか。

問題6 次の語は「堂々たり」と同じやうに活用する。活用させてみよ。

泰然たり 肅然たり 茫然たり 凜然たり 朗々たり 洋々たり
 濛々たり 確乎たり 嚴たり 燦たり

○この活用の連體形「たる」は、口語の文章の中にも屢用ひられる。

決然たる 態度で 會議に 臨んだ。

〔四〕「堂々たり」も、その活用の仕方について、「静かなり」と共通する点がある。故にこれも形容動詞と見ることができるといふ。「静かなり」のやうな活

用をナリ活用「堂々たり」のやうな活用をタリ活用といふ。文語の形容動詞の活用にはこの二種類がある。

〔五〕形容動詞の連用形のうち、「と」の形は、用言を修飾するのに用ひられる。

穩かに ふるまふ。 盛んに 活動す。

端然と 坐す。 朗々と 歌ふ。

〔六〕ナリ活用の連用形「に」は、それだけで中止法として用ひられるが、タリ活用の連用形「と」は、それだけでは中止法として用ひられず、必ず「して」を伴ふ。

氣候 溫和に、 風光 明らかなり。

風采 堂々として、 音聲 朗々たり。

〔七〕形容動詞の連體形已然形が、或る一定の助詞を受けて文を終止する時に用ひられることは、動詞・形容詞の場合と同様である。

何ぞ。かく茫然たる。

今宵月こそ。明らかなれ。

問題7 次の文から形容詞・形容動詞を抜き出し、その活用の仕方を示せ。

(一)もみは、柔かにして 工作に 便なれば、諸種の 箱を 作るに
用ひられ、つがは 堅くして 久しきに 耐ふるが 故に、家屋の
柱 土臺と なすに 宜し。

(二)けやき・栗かしはいづれも甚だ堅く、木目細やかなり。中にもけや
きは、木目美しく、磨けば美麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に、
装飾材として珍重せられ、栗は耐久・耐濕の性、殊に著しきを以つて、
家屋の土臺、鐵道の枕木等の用に供せられ、かしは最も堅くして彈
力に富むが故に、檣車運動器具のごとき強烈なる力を受くるもの
を製作するに適せり。

問題8 「自立語で活用の有るもの」の章の初めの例文に就いて、その
中の用言の活用の仕方を示せ。

十 助動詞の接續と活用(一)

〔一〕

- (一)本を 讀む。
- (二)本を 讀まず。
- (三)本を 讀みたり。
- (四)本を 讀ましむ。
- (五)本を 讀ましめたり。
- (六)本を 讀ましめず。
- (七)本を 讀ましめざりき。

問題1 (イ)右の例文を、意味の上からそれ〴〵比較してみよ。

- (ロ)その意味の違ひは、どの部分で表されてゐるか。
- (ハ)それ〴〵の例文には、助動詞が幾つ用ひてあるか。

(三) 助動詞に活用のあることを、右の例文に就いて示せ。

〔三〕 文語の助動詞も、用言に附いていろくの意味を加へてその叙述を助け、或は體言などに附いてこれに叙述する意味を加へる。さうして用言に附く場合には、どんな活用形に附くかが助動詞ごとにきまつてゐる。随つて、文語の助動詞も、口語の場合と同様、どんな語に附くか、どんな活用形に附くかによつて、幾つかの種類に分けられる。

問題2 口語の助動詞は、接續の仕方から見ても幾種類に分けられるか。

〔三〕 文語の助動詞は、口語のに比べるとその數が多く、又、口語のとは違つた語を用ひることが多い。又、活用に於いても口語と違つた所が多い。

〔四〕 す さす

手紙を 書く。
手紙を 書かす。

試験を 受く。
試験を 受けさす。

右の言ひ方を比べてみよ。この「す」「さす」は口語の「せる」「させる」に當るものである。

問題3 口語の助動詞「せる」「させる」はどんな意味を表す語か。

「す」「さす」は次のやうに活用する。

- (一) われに 知らせず。 汝に 見させむ。
- (二) 汝に 知らせたり。 外を 見させたり。
- (三) かれに 知らせず。 人を やりて 見さす。
- (四) 遂に 知らずる 時なし。 敢へて 見さすることなし。
- (五) その 由 知らすれども 見さすれど 人影もなし。
- (六) われに 知らせよ。 早く 見させよ。

問題4 右の例文を基にして、「す」「さす」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
す						
さす						
主な用法	連ズ なるに	連タ なるに	切言 るひ	連「時」 なるに	連ド なるに	命令の意味 で言ひ切る

問題5 「す」「さす」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

問題6 右の例文に於いて、「す」が附いてゐる動詞は何活用か。「さす」が附いてゐる動詞は何活用か。

「す」「さす」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かない。次の語の(一)の類の動詞には「す」が付き、(二)の類の動詞には「さす」が附く。

- (一) 打つ 喜ぶ 取る 養ふ 移す 死ぬ あり
- (二) 強ふ 見る 預く 來 出づ 射る 受く 作業す

問題7 (一)の動詞は何活用か。(二)の動詞は何活用か。

○サ變動詞に於いては、その未然形に「さす」が附いて、例へば「旅行せさす」「理會せさす」となるのが普通であるが、「旅行さす」「理會さす」のやうな言ひ方をすることもある。

〔五〕 しむ

武士の 名譽を 保持せしむ。
 敵將を 降らしめむと 欲す。
 團結を 強固ならしめたり。
 鬼神をも 泣かしむる 行動なり。
 人を 楽しましむれど、己は 樂しみを 求めず。
 われを 戦場に 行かしめよ。

右のやうに、「しむ」は「す」「さす」と同様の意味を表す。

問題8 右の例文を基にして、「しむ」の活用を表に作れ。用言のどの活

用と同じか。

基本の形	しむ	主な用法
未然形		ズ 連なるに
連用形		タリ 連なるに
終止形		言 切るひ
連體形		「時」 連なるに
已然形		ドモ 連なるに
命令形		命令の 意味 で言ひ切る

問題9 「しむ」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。「しむ」はすべての動詞に附くほか、形容詞・形容動詞にも附く。

問題10 次の語に「しむ」を付けてみよ。

動く 見る あり 死ぬ 來 作業す 正し 高し 静かなり
堂々たり

問題11 次の文はどちらが正しいと言へるか。

- (イ) 萬邦をして各、その所を得しむ。
- (ロ) 萬邦をして各、その所を得せしむ。

○口語の文章の中に、この「しむ」を用ひることがある。その場合には「しむ」は下一段に活用する。

二艘のボートに分乗せしめた。
敵の心膽を寒からしめる。

〔六〕 る らる

この助動詞は、口語助動詞「れる」「られる」に當るものである。

(イ) 工夫に心を奪はる。

餘一は、幾たびかことわりたれども、許されず。

扇はかなめぎはを射切られたり。

柿右衛門風と呼ばるる陶器を作り出せり。

人にそしらるれど顧みず。

頼みがひある者と思はれよ。

(ロ) 多年の苦心報いらる。

一藝ある者は、必ず擧げ用ひられむ。

參道は 夜來の 雨に 清められたり
敵は われに 追撃せられ、遂に 捕らへらるるに 至れり。
雨のごとく 射らるれど 毫も ひるまず。
人に 褒められよ。

問題 12 右の例文を基にして「らる」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
る						
らる						
主な用法	ズ 連なるに	タ 連なるに	言 切	「時」 連なるに	ドモ 連なるに	命令の意味 で言ひ切る

問題 13 「る」「らる」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

問題 14 右の例文に於いて、「る」の附いてある動詞は何活用か。「らる」の附いてあるのは何活用か。

「る」「らる」は動詞に附く。形容詞形容動詞には附かない。次の(一)の類の動詞には「る」が付き、(二)の類の動詞には「らる」が附く。

- (一) 焼く 移す 打つ 養ふ 怪しむ 送る 死ぬ あり
- (二) 見る 用ふ 閉づ 預く 慰む 蹴る 來 罪す

問題 15 (一)の動詞は何活用か。(二)の動詞は何活用か。

○サ變動詞に於いては、その未然形に「らる」が附いて「鍛鍊せらる」「うはさせらる」となるのが普通であるが、「鍛鍊さる」「うはささる」のやうな言ひ方をすることもある。

〔七〕 (一)一日に 十里は 行かるべし。

この 關所、たやすくは 越えられず。

(三)戦場の 便りのみ 待たる。

社前にぬかづけば、ありし日の姿、思ひ出でらる。
〔三〕將軍 戰地より歸らる。

先生も 參加せらる。

右の(一)(二)(三)の「らる」は、それごとく違つた意味を表す。又、前に擧げた「らる」も、これらとは意味が違つてゐる。

問題16 一體どう違ふか。口語の「れる」「られる」のことも参照して考へよ。

これらの「る」「らる」は、前に擧げた「らる」と、活用も續き方も同じである。但し、(一)及び(二)の場合の「らる」には命令形がない。

問題17 次の「らる」を區別せよ。

(一) 世界に 名を 知らる。

(二) 廣く 用ひらる。

〔八〕 尊敬の意味を表すには、助動詞「る」「らる」を用ひるほかに、尊敬の意味を含んだ特別の動詞を用ひることがある。その主なものは、次の通りである。

召す 思し召す きこしめす しろしめす たまふ のたまふ
います まします おはす おはします 仰す

このうち「召す」「思し召す」「きこしめす」「しろしめす」「仰す」などには、更に尊敬の助動詞「る」「らる」の附くことがある。

〔九〕 「す」「さす」「しむ」が尊敬の意味を表すことがある。この場合は大抵「らる」「たまふ」のやうな尊敬の意味をもつ語と共に用ひられる。

ほのかに 承れば、この 御苑は、明治天皇 御みづから 森の下道、下草まで 何くれと 御仰せありて、自然の ままに 作らせたまひ、昭憲皇太后 かぎりなくめでさせたまひて、しばしば 行啓 あらせられたりとぞ。
御徳を 後の 世に 垂れさせらる。

陛下 行幸せしめたまふ。

【10】ず

川霧 深く 立ちこめて、甲の 色も さだかならず。
今にして 征かざれば 遂に 日の本の をのこと 生れし 榮あ
らざらむ。

苦心に 苦心を 重ねて 集めたる 出版費は、遂に 一錢も 残
らず なりぬ。

しばし 感じて やまざりき。

己に 劣らぬ 家來 一人 伴なひたり。

己の 欲せざる ところ、人に 施す こと なかれ。

境内は さして 廣からねど、木立 ものふりて いと 神々し。

信長の 兵は 二千に 足らざれど、急に 義元の 本陣に 討ち
入りぬ。

賤しきを そしらざれ。

右のやうに「ず」は打消を表す。口語助動詞の「ない」に當る。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ざら	ざり	ず	ざる	ざね	ざれ
主な用法	連なるに	連なるに	切言	連なるに	連なるに	命令の意味で言ひ切る
	バ・ム	ナ・ル・キ	言	「時」	ド・モ	

問題 18 これに似た活用が用言にあるか。

問題 19 「ず」はどんな活用に附くか。例文によつて調べてみよ。

「ず」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 20 次の語に「ず」を付けてみよ。

- (一) 聞く 勝つ 見る 起く 蹴る 助く 死ぬ あり 來 練習す
- (二) よし 正し
- (三) 静かなり 堂々たり

【III】 む(ん)

雁列をみだる。この野に必ず伏兵あらむ。
 千萬人といふともわれ往かむ。
 羽衣なくては、飛行の道も絶え、天上にかへらむことも
 かなふまじ。

大君の邊にこそ死なぬ。

右のやうに「む」は推量する意味、又は話し手の意志を表す。口語助動詞の「う」「よう」に當る。

○この「む」は「ん」と發音する。又發音に従つて「ん」と書くことも少くない。

主な用法	む(ん)	○	○	む(ん)	む(ん)	め	○
				切言	「時」に	ドモに	
				るひ	連なる	連なる	
基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	

問題 21 これに似た活用が用言にないか。

問題 22 「む(ん)」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「む(ん)」は動詞形容詞形容動詞に附く。

問題 23 問題 20 の例語に「む(ん)」を付けてみよ。

○「む(ん)」と殆ど同じ意味を表すものに「むす(んず)」がある。現代の文語では殆ど用ひないが、昔の文章には屢々現れる。終止形「むす(んず)」、連體形「むする(んする)」、已然形「むすれ(んすれ)」の三形だけがある。

汝がやうなる者は、いつも重忠にこそ助けられんすれ。

【III】 じ

喜びの來たらむ日も遠からじ。
 かへらじとかねて思へば、あづさ弓なき數に入る名をぞとむる。

右のやうに、「じ」は「む(ん)」に對する打消であつて、推量や意志を表す。口

語の「ないだらう」又は「まい」の意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
じ	○	○	じ	(じ)	(じ)	○
主な用法			切言 るひ	(時)に 連なる	(コソの結 びとして)	

○「じ」の連體形及び已然形は、古い時代に用ひられたことがある。

問題24 「じ」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「じ」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題25 問題20の例語に「じ」を付けてみよ。

〔三〕 まほし

一人 行かまほし。

さほど 行かまほしくば、伴なひて 行かむ。

さまで 見まほしからず。

まことに あらまほしく 思はる。いと 行かまほしかりき。

少しの ことにも 先達は あらまほしき ものなり。

かくこそ あらまほしけれ。

右のやうに、「まほし」は希望する意味を表す。この助動詞は、昔の文章には用ひられたが、現代の文語では、普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
まほし	まほしく まほしから	まほしく まほしかり	まほし	まほしき	まほしけれ	○
主な用法	バズに 連なる	ナル・キ に連なる	言 るひ	「時」に 連なる	ドモに 連なる	

問題26 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

問題27 「まほし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「まほし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題28 問題20の例語に「まほし」を付けてみよ。

〔四〕 まし

早く 知らましかば、かゝる 不覺は なからまし。
とや。せまし、かくや。せまし。

この「まし」は、實際さうでない事を假にさうと想像して言ふ場合に用ひる。又「む(ん)」と同様に、口語助動詞「う」「よう」の意味に用ひることもある。「まし」は昔の文章には用ひられたが、現代の文語では、普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
まし	(ませ)	○	まし	まし	ましか	○
主な用法	(連なるに)		切言 るひ	連「時」 なるに	連「バ」 なるに	

○上代には「ませ」といふ形があり、「ませば」と用ひられた。

問題 29 これに似た活用が用言にあるか。

問題 30 「まし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「まし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 31 問題 20 の例語に「まし」を付けてみよ。

十一 助動詞の接續と活用(二)

〔二五〕
き

將兵 すべて 感泣せざるは なかりき。

名將の 劔 投ぜし 古戰場。

大いに 治績を 擧げしかども、長く その 職に をる こと
能はざりき。

右のやうに、「き」は過去を表すのに用ひる。口語ではこの場合「た」を用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
き	○	○	き	し	しか	○
主な用法			切言 るひ	連「時」 なるに	連「ド」 なるに	

問題32 これに似た活用が用言にあるか。

問題33 「き」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。「き」は動詞形容詞形容動詞に附く。

問題34 問題20の例語に「き」を付けてみよ。

「き」の終止形はカ變の動詞には全く附かない。その連體形已然形はカ變の連用形に附くほか未然形にも附く。

來^カし
しか

來^カし
しか

又、「き」の終止形は、サ變の動詞の連用形に附くが、連體形已然形はサ變の未然形に附く。

し—き

せ^サし
しか

糧 盡きて 草の 根を 食ひ物と しき。

激しく 敵を 砲撃せしかば、敵の 艦列 忽ち 亂れたり。

二六 けり

それより 後、義家は 匡房を 師として 學びけり。

敵も 味方も これを 聞きて、一度に どつとぞ 笑ひける。

しばし 待てと 言ひけれども、耳を 傾くる 者 なかりき。

右のやうに、「けり」は過去を表すのに用ひる。口語では「た」がこれに當

る。この「けり」は又、咏歎の意味にも用ひる。

まことの 契り^{ちぎり}は 親子の 間にぞ ありける。子をば 人の 持

つべかりける ものかな。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○
主な用法	連 ^ズ なるに		切言 るひ	連 ^{「時」} なるに	連 ^{ドモ} なるに	

○「けら」は上代に用ひられたが、現在では用ひない。

問題 35 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

問題 36 「けり」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「けり」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 37 問題 20 の例語に「けり」を附けてみよ。

問題 38 次の「けれ」を區別せよ。

(一) 波こそ 高けれ。

(二) 夢にこそ 見けれ。

〔七〕ぬ

遂に 敵軍を 攻め破りぬ。

この 事 江戸に 聞えなば 必ず 悪しかりなむ。

朱雀門まで 一夜が ほどに 塵灰ちりはいと なりにき。

色は にほへど 散りぬるを、わが 世 たれぞ 常ならむ。

平家は 落ちぬれど、源氏は 未だ 入りかはらず。

右のやうに、「ぬ」は完了、即ち動作又は事件が完結する意味を表す。口語の「た」に當る場合が多いが、又「てしまふ」「てしまつた」「やうになる」「やうになつた」に當る場合もある。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	(ぬ)
主な用法	ム連なるに	キ連なるに	言切るひ	「時」連なるに	ドモ連なるに	(命令の意味で言ひ切る)

○命令形として古く「ぬ」といふ形があつた。

はや 船出 して、この 浦を 去りぬ。

問題 39 この活用は、用言のどの活用と同じか。

問題 40 「ぬ」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「ぬ」は動詞・形容詞に附く。

問題 41 問題 20 の例語に「ぬ」を付けてみよ。

○古くは「ぬ」はナ變の動詞には附かなかつたが今は附けることもある。

問題 42 次の「ぬ」を區別せよ。

(一)日は没しぬ。

(二)見ぬ 古は 知らず。

(三)文と 武とを 兼ぬ。

二つ

とかくして 今日も 暮しつ。

たゞいま 敵を 滅してむ。

遂に 兼綱を 討つてけり。

この 方面の 戦闘に、二子を 失ひ給ひつる 閣下の 心いかにぞ。

しばしとてこそ。立ちとまりつれ。

われに 得させてよ。

右のやうに、「つ」は「ぬ」と同様完了を表す。

問題 43 「つ」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
つ						()
主な用法	連なるに	連なるに	切言	連なるに	連なるに	(命令の意味で言ひ切る)
	ム	キ	言	時	ド	
	なるに	なるに	る	なるに	なるに	

○命令形は、現代の文語では餘り用ひない。

問題 44 「つ」はどんな活用形に附くか。右の例文によつて調べてみよ。

「つ」は動詞形容詞形容動詞に附く。

問題 45 問題 20 の例語に「つ」を付けてみよ。

問題 46 次の「つ」を區別せよ。

(一)所持の 品を 捨つ。

(三) 見るべきものは見つ。

○「行きてけり」「行きてき」の「て」は助動詞「つ」の連用形であるが、「行きて聞ふ」の「て」は助詞である。

〔二六〕 たり

わきにはさみ持ちたる弓を、海中にとり落したり。
戸ごとに 國旗を 掲げたり。

美名を 今に 傳へたり。

かぶとの 眞向を 射たらむに などか 通らざるべき。

一の木戸口の 邊まで 寄せたりけり。

苔むしたる 岩石 壁のごとく 突き立ちたり。

更に 第三彈を 受けたれども 少しも ひるまず。

その 修行者をば 暫く きて 置きたれ。

右のやうに「たり」は過去完了、又は「てある」「てゐる」の意味に用ひる。即ち口語の「た」に當る。

ち口語の「た」に當る。

問題 47 「たり」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たり						()
主な用法	連ム なるに	連キ なるに	切言 るひ	連「時」 なるに	連ドモ なるに	(命令の意味 で言ひ切る)

○命令形は、現代の文語では用ひない。

問題 48 「たり」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「たり」は動詞に附く。形容詞形容動詞には附かない。

問題 49 問題 20 の例語の(一)に「たり」を付けてみよ。

〔二七〕 たし

一日も 早く 故國に 歸りたし。

歸りたくば 速かに 出發せよ。 父母に 逢ひたからむ。

御目に かゝりたく 存じ候。 南方に 行きたかりき。
 家に ありたき 木は 松櫻。 定めて 行きたかるべし。
 舞をも 見たけれども、それは 次の ことと せむ。
 右のやうに、「たし」は自身の希望する意味を表す。口語の「たい」に當る。
 問題 50 「たし」の活用を表に作れ。用言のどの活用に似てゐるか。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たし						○
主な用法	ベ・ズに連なる	ナル・キに連なる	切言	「時」に連なる	ドモに連なる	

問題 51 「たし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。
 「たし」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かない。

問題 52 問題 20 の例語の(一)に「たし」を附けてみよ。

〔三〕 けむ(けん)

昔の 友は いづち 行きけむ。
 草も 木も なびきふしけむ 大御代を 仰ぐ 今日こそ 楽しけれ。
 人々の 心の うち、 さこそは 嬉しうも また あはれにも ありけむ。
 右のやうに、「けむ(けん)」は過去の事を推測する意味を表す。口語の「ただらう」
 「たであらう」の意味に用ひる。この語は現代の文語では普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
けむ(けん)	○	○	けむ(けん)	けむ(けん)	けめ	○
主な用法			切言	「時」に連なる	ドモに連なる	

問題 53 これに似た活用が用言にないか。

問題 54 「けむ(けん)」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「けむ(けん)」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 55 問題 20 の例語に「けむ(けん)」を附けてみよ。

問題 56 次の「けむ」を區別せよ。

- (一) 何事か ありけむ。
- (二) 當つて 碎けむ。

十二 助動詞の接続と活用(三)

〔III〕 べし

- (一) 演習に 参加する 軍艦は 百艘を 超ゆべし。
- (二) 明日 必ず 参上 致すべし。
- (三) 一念は 岩をも 通すべし。
- (四) 國民として 盡くすべき 道なり。
- (五) 明朝 八時に 集合すべし。

右のやうに「べし」は、口語の「う」「よう」のやうに推量や意志を表すほかに、「ことができる」「可能」「なければならぬ」「當然」「なさい」「命令」などの意味を表す。

「べし」は次のやうに活用する。

もし 行くべくば 直ちに 行かむ。

心は 常に 勞すべし、苦しむべからず。

いつまでも かくのごときものに 満足すべくも あらず。

つとに 正すべかりし ものなり。

數十年の 間に 驚くべき 發達を 遂げたり。

未だ 幼かるべけれど、その 巧みさ 言はむ かたなし。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
べし	べくば	べかり	べし	べき	べけれ	○
主な用法	バ・ズに連なる	ナル・キに連なる	言切る	「時」に連なる	ドモに連なる	

問題 57 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

「べし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ變を除く)と、ラ變形

容詞形容動詞とでは、その附く活用形を異にする。

問題 58 次の動詞に「べし」を付けてみよ。どんな活用形に附くか。

勝つ 知る 見る 伸ぶ 蹴る 受く 死ぬ 來 運動す

問題 59 ラ變形容詞形容動詞に「べし」を付けてみよ。どんな活用形に附くか。

あり 高し 美し 丁寧なり 決然たり

○「べし」の連體形「べき」は、口語の文章に於いても用ひられることがある。これこそ、われらの行くべき道ではなからうか。

〔三〕 まじ

(一)世にかほどの愚者はあるまじ。

(二)今の若い者はなど口はいたきことを申すまじ。

(三)言ふまじきことを言ひ、行ふまじきことを行ふ。

(四)ゆめ 怠るまじきぞ。

右のやうに、「まじ」は推量意志を表すほかに、「してはならない」(當然)「するな」(禁止)などの意味を表す。大體「べし」の打消と見ることができ、口語の「まい」に當る。

「まじ」は次のやうに活用する。

參るまじくば そのゆゑを申せ。

さる事あるまじく 思はる。 人には言ふまじかりけり。

武勇はいかなる者にも劣るまじ。

いかにもかなふまじき 由答へたり。

冬枯れの景色こそ。 秋にはをさく、劣るまじけれ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
主な用法	連なるに	ナル・キに連なる	言ひ切る	「時」に連なる	ドモに連なる	

問題 60 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

問題 61 「まじ」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「まじ」は動詞形容詞形容動詞に附く。但し、動詞(ラ變を除く)と、ラ變形容詞形容動詞とは、その附く活用形を異にする。

問題 62 問題 58 の例語に「まじ」を付けてみよ。動詞のどんな活用形に附くか。

問題 63 問題 59 の例語に「まじ」を付けてみよ。ラ變形容詞形容動詞のどんな活用形に附くか。

〔四〕 らむ(らん)

雲の いづくに 月 宿るらむ。

山門 高き 松風に 昔の 音や こもるらむ。

みづからは いみじと 思ふらめど いと 口惜し。

右のやうに「らむ(らん)」は現在の事實に就いて想像する語で、口語の「たらう」又は「であらう」の意味に用ひる。この語は現代の文語では普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(らむ)	○	○	(らむ)	(らん)	らめ	○
主な用法			切言 るひ	連「時」 なるに	連ドモ なるに	

問題 64 これに似た活用が用言にないか。

問題 65 「らむ(らん)」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「らむ(らん)」は、動詞形容詞形容動詞に附く。但し、動詞(ラ變を除く)と、ラ變形容詞形容動詞とは、その附く活用形を異にする。

問題 66 問題 58 の例語に「らむ」を付けてみよ。動詞のどんな活用形に附くか。

問題 67 問題 59 の例語に「らむ」を付けてみよ。ラ變形容詞形容動詞のどんな活用形に附くか。

問題 68 次の「らむ」を區別せよ。

(一)途中には 旅店 あらむ。

〔五〕 めり

(二)など しか 言ふらじ。

はや夜も 明くめり。

この 人をなむ。聖人とは いふめる。

何事をか 言ふめれど、聲 低くて 聞えず。

右のやうに「めり」は「様子だ」と大體を推量して言ふ意味に用ひる。「めり」は昔の文章には用ひられたが、現代の文語では、普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
めり	○	(めり)	めり	める	めれ	○
主な用法		(キ)連なるに	(言)切るひ	(時)連なるに	(ト)連なるに	

○連用形「めり」は、これに「き」「し」「しか」の附いたものが稀に用ひられただけである。

問題 69 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

問題 70 「めり」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「めり」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ヲ變を除く)と、ヲ變・形容詞・形容動詞とでは、その附く活用形を異にする。

問題 71 問題 58 の例語に「めり」を付けてみよ。動詞のどんな活用形に附くか。

問題 72 問題 59 の例語に「めり」を付けてみよ。ヲ變・形容詞・形容動詞のどんな活用形に附くか。

活用形に附くか。

〔六〕 り

勝敗 既に 定まれり。

四月より 級長と なれり。

その 翁 頭に 雪を いたゞけり。

時計は 絶えず 時を 刻めり。

頂上に 達せるは 十一時なりき。

屏風に 描ける 繪の 美しさ 言はむ かたなし。

右のやうに、「り」は「たり」と同じやうに、過去完了、又は口語の「てゐる」「てある」の意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	(れ)
主な用法	(連なるに)	(連なるに)	切言	「時」 連なるに	(連なるに)	(命令の意味) で言ひ切る

○未然形・連用形・已然形・命令形は、現代の文語には用ひない。

問題73 この活用は、用言のどの活用と同じか。

問題74 「り」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「り」は四段活用の已然形と、サ變の未然形だけに附く。

問題75 次の語に、「り」を附けてみよ。

(一)取る 書く 出す

(二)努力す 勉強す

問題76 次の「めり」を區別せよ。

(一)船は 次第に 沈むめり。

(二)船は 水中に 沈めり。

十三 助動詞の接續と活用(四)

〔三〕 ごとし

喜びを 歌ふがごとく、行く われを 迎ふるごとし。

兩國の 關係は いよく、切迫せるがごとし。

果して 君の 言のごとくば、予は 黙すること 能はず。

大鳥居は 巨人のごとく わが 行く手に 立てり。

汽車は 風光 繪のごとき 湖畔を 走る。

最近の 暑さは 近年 稀にして、昨日のごときは 實に 三十四度に 達せり。

右のやうに、「ごとし」は他にたとへて言ふのに用ひ、又、不確かな斷定を表すのに用ひるが、そのほか、例示に用ひることがある。口語の「やうだ」に當る。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○
主な用法	連なるに	連なるに	切言るひ	連なるに		

○「ごとし」には、已然形・命令形がない。

○語幹「ごと」が連用形又は終止形のやうに用ひられることがある。

月のごと、日輪 ほのかに 浮かぶ。

かつこう、かつこう、かんこ鳥、こだまのごと、夢のごと。

問題 77 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

問題 78 右の例文では、「ごとし」はどんな品詞に附いてゐるか。

「ごとし」は動詞の連體形、又はこれに助詞「が」の附いたもの、又は體言に助詞「の」の附いたものに附く。

〔六〕「ごとくなり」は「ごとし」に「なり」の附いたものである。

けはしき坂を登ること、平地を 行くがごとくなり。

軍兵 雲霞のごとくに 馳せ集る。

「ごとし」に缺けてゐる已然形の代りとしては「ごとくなれ」を用ひる。

禍福は あざなへる 繩のごとくなれば、逆境に 立てりとして

深く 歎くべきに あらず。

〔七〕らし

雨 降るらし。

雨 降るらしく 見ゆ。

雨の 降るらしき 空あひなり。

右のやうに、「らし」は推定する意味を表す。口語の「らしい」がこれに當

る。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らし	○	らしく	らし	らしき	○	○
主な用法		ナルに 連なる	言 切るひ	「時」 連なる		

問題 79 これに似た活用が用言にないか。

問題 80 「らし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「らし」は動詞形容詞形容動詞に附く。

問題 81 問題 20 の例語に「らし」を付けてみよ。

「らし」は又、體言にも附く。

明日は 雨天らし。

かなたに 寺らしきもの 見ゆ。

【三〇】 この「らし」は、古くは次のやうに用ひた。

山の紅葉も今は散るらし。

み雪降る冬は今日のみ、鶯の鳴かむ春べは明日にしあるらし。

奥山の雪消の水ぞ今増さるらし。

年月のゆきふりゆけば、草も木も老いこそすらし。白く見ゆれば。

活用は、次のやうにまとめられる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らし	○	○	らし	(らし)	(らし)	○
主な用法			言 切るひ	「結」 びの	「コソ」 びの	

○連體形は「ぞ」の結び、已然形は「こそ」の結びとしてのみ用ひられた。

問題 82 この「らし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

この「らし」は動詞の終止形に附く。但し、ラ變の動詞には連體形に附く。

【三一】 なり

大日本は 神國なり。
 若き人に 見ならはせんとて かくは するなり。
 こは まことに 驚くべき ことならずや。
 孔子は 正義の 念 強き 人なりき。
 實朝は 頼朝の 子にして 鎌倉右大臣と いふ 歌人なり。
 われらは 寸時も 日本人なる ことを 忘るべからず。
 器量 ある 武將なれども、なほ 軍の 道を 知りたまはず。
 右のやうに、「なり」は口語の指定の「だ」と同じ意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	○
主な用法	ズ連なるに	キシテに連なるに	言ひ切る	「時」に連なるに	ドモに連なるに	

問題 83 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

問題 84 右の例文では、「なり」はどんな品詞に附いてゐるか。
 「なり」は體言又は用言の連體形に附くのが普通である。

問題 85 次の語に「なり」を付けてみよ。

- (一) 軍人 學者 汽車 汽船
 - (二) 行く 見る 出づ 起く 蹴る 死ぬ 來 爲⁺ あり 早し
 - 悲し のどかなり 潑刺たり
- 「なり」の連體形「なる」は、「にある」の意味又は「といふ」の意味に用ひることがある。

大和なる 法隆寺。
 顔回なる 者 あり。

○「ごとし」に「なり」が附く場合は、連體形に附かずに、その連用形に附いて、「いどくなり」となる。

〔三〕 「なり」は又、次のやうに用ひることがある。
 秋の 野に 人 まつ 虫の 聲 すなり。

秋風に 初雁がねぞ きこゆなる。

即ち動詞の終止形に附いて詠歎の意味を表す。

〔三〕 たり

身は 帝國の 軍人たり。 君は わが 良友たり。

常に よき 生徒たらざるべからず。

われ かつて この 學校の 生徒たりき。

臣としての 道を 盡くすべし。

人の 友たる 者は、誠 なかるべからず。

身は 三軍に 將たれども、常に 士卒と 寢食を 共にす。

從順にして 勇敢なる 生徒たれ。

右のやうに、「たり」も「なり」と同様、口語の指定の「だ」と同じ意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
主な用法	ズ連なるに	キ・シテに連なる	言切るひ	「時」に連なる	ドモに連なる	命令の意味で言ひ切る

問題 86 この活用は、用言のどの活用と同じか。

問題 87 右の例文では、「たり」はどんな品詞に附いてゐるか。

「たり」は體言だけに附く。

〔一〕こは われらの 學校なり。

われらは よき 生徒たらむ。

〔二〕その 建築は 甚だ 美麗なり。

前途は 洋々たらむ。

〔一〕は體言に、口語の「だ」に當る助動詞「なり」「たり」が附いたものである。〔二〕は形容動詞である。この二者を混同してはならない。

問題 88 次の「たり」を區別せよ。

- (一) 日本第一の名將たり。
- (二) その 決意 斷乎たり。
- (三) 橋中佐は とうと 倒れたり。

問題 89 次の「なり」を區別せよ。

- (一) 水は 液體なり。
- (二) 風 冷やかなり。

〔三〕 文語に用ひる助動詞は、右に挙げた通りである。さうして、以上は、どんな種類の語又はどんな活用形に附くかによつて、順序立てたものである。

問題 90 (イ)用言だけに附くのは、どの助動詞か。

(ロ)動詞だけに附くのは、どの助動詞か。

(ハ)動詞のほか形容詞にも附くことのできるのは、どの助動詞か。

か。形容動詞に附くことのできるのは、どの助動詞か。

問題 91 (イ)用言の未然形に附くのは、どの助動詞か。

(ロ)連用形に附くのは、どの助動詞か。

(ニ)終止形に附くのは、どの助動詞か。

(三)連體形に附くのは、どの助動詞か。

(ホ)已然形に附くのは、どの助動詞か。

問題 92 用言や助動詞以外の語に附くことのできるのは、どの助動詞か。

〔三〕 既に調べて来たやうに、助動詞にはいろいろ活用が違つたものがある。故に助動詞は、その活用の仕方に基づいて、幾つかの種類に分けることができる。

問題 93 (イ)動詞と同じ活用、又はこれに準ずる活用をするものはどれか。それは動詞のどの種類の活用と同じか。

(ロ)形容詞と同じ活用又はこれに準ずる活用をするものはどれか。

(ハ)形容動詞と同じ活用又はこれに準ずる活用をするものはどれか。

(ニ)用言とは違つた特殊の活用をするものはどれか。
(ホ)語形變化のないものはどれか。

〔七〕 尊敬謙讓の意味をもつてゐる動詞又は「あり」の意味を丁寧に言ふ動詞を、助動詞のやうに用ひることがある。

(一)御衣を たまふ。

殿下 臨場したまふ。

(二)歌を 奉る。

深く 頼み奉る。

文を まゐらす。

幼主を たすけまゐらす。

(三)なにがしも 候ふ。

無事に 暮し居り候。

ここに 侍り。

われらも 既に聞き侍り。

問題 94 左の文中の傍線を附けた助動詞の用法を説明せよ。

(一)されば、今この馬、ゆめにも 求め得べしとは思はざりき。

(二)されど、これはわらはこの家に まゐりし時、この鏡の

下に父の入れたまひて、ゆめゆめ、世のつねの ことに用

ふべからず。汝の夫の一大事 あらん時に まゐらせよとて、

たまひき。

(三)梶原「いかに佐々木殿。水の底には大綱 あるらん。心得た

まへ。」と いひければ、佐々木、刀を 抜いて 馬の 足に かか

りたる。大綱どもを、ふつふつと 打ち切り、打ち切り、宇治川

速しと いへども、生食と いふ 日本一の馬に 乗りたれば、

眞一文字に さつと 渡り、向かふの岸に 打ちあげたり。

問題 95 左の文から助動詞を抜き出し、その用法を説明せよ。

(一)松平信綱は、幼名を長四郎といへり。九歳にして、將軍の若君、竹千代に仕へたり。長四郎、十一歳の時なりき。或る日、竹千代、かなた

の御殿の軒端に、雀の巢くひたるを見つけて、長四郎雀の子を取つて参れ。」と命じぬ。

(二) 日暮れて後、長四郎、こなたより屋根傳ひに行きて、今や取らんとする時、ふと踏み損じて、中庭にどろりと落つ。將軍秀忠、刀を取りて障子を引きあぐれば、御臺所ともしび取りて出でらる。見れば長四郎なり。

(三) 將軍、

「汝、何しにここに來たれるぞ。」

「雀の巢くひたるを見て、餘りの欲しさに参りて候。」

「いや、己の心にてはあるまじ。誰に教へられて來たれるぞ。」

「いな、教へられたるには候はず。」

(四) 幾度責め問はるれども、長四郎の答へは初めに變らざりき。

「おのれ、ありのまゝに申さざるは不届きなり。」

とて、大きな袋に長四郎を押し入れ、口を封じて、

「ありのまゝを申さざる間は、いつまでもかくてあるべし。」

とて、袋を柱に掛けられたり。

(五) 翌朝、御臺所、長四郎の心をあはれみて、手づから袋を開き、食を與へて、再び封ぜらる。晝頃、將軍、長四郎に問はるれども、長四郎遂に言葉を變へず。かたはらより御臺所わび言あり、始めて許されぬ。

(六) 後に將軍、御臺所に向かひて、

「かれが今の心にて人とならば、竹千代には無二の忠臣たるべし。」

とて、大いに喜ばれたりとぞ。

問題 96 次の文に誤りがあつたら正せ。

(一) この所に塵芥捨つるべからず。

(二) 雨漸く晴れり。

(三) かれは承諾するまじ。

(四) 奮闘ししかども、遂に等外に落ちたりき。

(五) 二人ともよく勉強して居られる由、安心致し候。

十四 助詞の種類と用法

〔一〕

敵 忽ち ほろぶ。
敵を ほろぼす。

戦力 とみに 増す。
戦力を 増す。

〔二〕

かれは 行かず。 汝は 行け。

かれは 行かざれど、 汝は 行け。

〔三〕

風 吹き出でたり。

風さへ 吹き出でたり。

〔四〕

こは 汝の 本なり。

こは 汝の 本なりや。

〔五〕

勇 本を 正雄に 與ふ。

正雄 本を 勇に 與ふ。

問題 1 右の例文に就いて、助詞がどのやうな働きをしてゐるか考へ

てみよ。

問題 2 右の例文の助詞は、どんな品詞に附いてゐるか。

〔一〕 文語の助詞も、口語の助詞と同じやうに、自立語に附いてその語と他の語との關係を示し、或はこれに一定の意味を添へる。故に、助詞に於いては、どういふ語に付き、どういふ語にかゝつて行くかを明らかにすることが大切である。この點から、助詞を分類すると、口語の場合と同様、大體四種類になる。

〔二〕 文語の助詞は、口語のとは違つた語を用ひることがあり、又同じ語を用ひても、意味や用ひ方の違ふものがある。

〔三〕 第一類

が

〔一〕 乗手が 用心するならば、馬も けがは なかるべし。

梶原が 乗りたる 磨墨は、川中より 押し流され、遙かの 下より 打ちあげたり。

(二)梅が 香に のつと 日の 出る 山路かな。

仰ぎ願はくは、臣が 心を あはれみたまへ。

右のやうに「が」は、主語を示すほかに、文語では又、體言に連なる修飾語を作るために用ひることがある。

の

(一)白々と あんずの 花の 咲き出でて、今年も 春の 日ざしとなりぬ。

こは 友よりの 文よ。

(二)御民 われ 生ける しるし あり、天地の 榮ゆる 時に あへらく 思へば。

さながら 珊瑚珠の 輝くに 似たり。

ぼらの 芽の 針 柔かに 春雨の 降る。

右のやうに「の」は、體言に連なる修飾語を作るほかに、主語を表すのに用ひることが少くない。

を

(一)書を 讀む。

色の 美しきを 賞す。

友の 滿洲に 行くを 送る。

(二)野を 過ぐ。

空を 飛ぶ。

(三)早くも 戦列を 離るるもの あり。

に

(一)田舎に 住む。

朝 五時に 起き出づ。

東京に 大地震 あり。

(二)新京に 到着す。

(三)かれは 軍人に なれり。

灰燼に 歸す。

(四)見舞に、行く。 筆 買ひに 行く。
 (四)雨に 降らる。 弟に 寫さしむ。
 右のやうに、「を」「に」は口語と格別の違ひはない。

へ

北へ 飛ぶ。 京都へ 去る。

右のやうに「へ」は、文語では主として方角を示すために用ひる。

と

(一)友と 遊ぶ。
 (二)水 解けて 水となる。
 (三)これを 歌枕と いふ。 「敵艦 見ゆ」との 報告 あり。
 (四)叔父と 叔母とを 訪ふ。

右のやうに、「と」は口語と格別の違ひはないが、(四)のやうに對等の資格で並ぶ體言を結びつける場合には、文語では「と」を一々各語の下に附けるのが本格である。しかし誤解を招くおそれのない場合には、最後の「と」をはぶくこともある。又、(三)のやうに、引用文などを受ける場合には、その終りの用言又は助動詞の終止形を連體形にすることがある。

より

終日 業務を 取り扱はしむると いふ。
 (一)鐵より 堅き かひな あり。
 (二)泣くより ほかの ことぞ なき。
 (三)大阪より 歸る。 會は 六時より 始る。

問題： 右の(三)の例文を口語に改めよ。
 右のやうに、「より」は口語と同じ意味を表すほかに、口語の「から」の意味にも用ひる。
 にて

(一) 筆にて書く。

飛行機にて歸る。

(二) 庭にて遊ぶ。

(三) 病氣にて休む。

右のやうに「にて」は口語の「で」に當る。

問題 4 次の「にて」は、この「にて」と同じか。

父は 畫家にて、子は 詩人なり。

〔五〕 この類の助詞は、主として體言に附いて、その體言が、同じ文中の他の語に對して、どんな關係に立つかを示すものである。これを格助詞といふことがある。

〔六〕 文語では、「を」して「を」を以つて「に」就いて「によつて」に於いて「に於ける」などの言葉を、第一類の助詞と同様に用ひる。

斥候をして 敵状を 探らしむ。

かれの 沈着なるは これを以つて 知るべし。

戰況に就いて 語らん。

無線電信によつて 危急を 報ず。

會議は 東京に於いて 開催す。

平安時代に於ける 國文學の 發達は、假名の 發生に 負ふところ 多し。

〔七〕 第二類

ば

(甲) 敷島の やまと心を 人 とはば、朝日に にほふ 山ざくら花。
もし 甲の 上を 射ば、矢じり 碎け折れて 通らぬ ことも あらん。

近くば 寄つて、目にも 見よ。

(乙) 風 吹けば、波 立つ。

遠き 慮り おしはか なければ、近き 憂ひ あり。

今日は、雨 降れば 外出せず。

問題5 (甲)の例文では、「ば」は用言のどんな活用形に附いてゐるか。

(乙)の例文ではどうか。

問題6 右の例文を口語に改めよ。

右のやうに、文語では、「ば」は未然形に附くものと已然形に附くものがある。未然形に附いた場合は、或る事がらを假定して、それを條件とすることを表す。已然形に附いた場合は、確定した事がらを條件とすることを表すほか、「から」「ので」の意味をも表す。

とも

人 退くとも 退かず、人 進めば われ いよく 進む。

いかに 堅固なりとも 破れざる こと あらじ。

いかに 心は 堅くとも、身は 鐵石に あらざれば、砲丸に 倒

るる 兵士 數 知れず。

苦しくとも 忍ぶべし。

問題7 右の例文で「とも」は動詞のどんな活用形に附いてゐるか。形

容動詞にはどうか。形容詞にはどうか。

問題8 右の例文を口語に改めよ。

「とも」は動詞・形容動詞の終止形・形容詞の未然形「く」「しく」に附く。

又、或る種の助動詞にはその終止形に、或る種の助動詞にはその未然形に附く。口語の「ても」の意味に用ひる。

○古くは「とも」の意味で「と」を用ひたことがある。

繪に 描くと 筆も 及ばじ。

ど ども

(一)手を 分ちて 探りたれど(ども)、遂に 發見し 得ざりき。

近けれど(ども) 車にて 行きぬ。

(二)樹 靜かならんと 欲すれども 風 止まず、子 養はんと 欲す

れども 親 待たず。

呼べど 答へず、さがせど 見えず。

問題9 右の例文で「ど」「ども」は、用言のどんな活用形に附いてゐるか。

問題10 右の例文を口語に改めよ。

「ど」「ども」は、用言及び助動詞の已然形に附いて、口語の「けれども」又は「ても」の意味に用ひる。

○なほ「とも」「ども」の代りに「も」を用ひることがある。

何らの 事由 あるも、議場に入る ことを 許さず。

遠く 南方に 敵を 搜索せしも、遂に その 隻影を 見ず。

問題11 右の文を口語に改めよ。

が

日暮るるまで 待ちたるが、遂に 友は 來たらざりき。

保己一は 五歳の 時 めくらと なりしが、後には 名高き 學

者と なれり。

問題12 次の「」が「を」を區別せよ。

(一)冬に 咲くが おもしろきなり。

(二)ここ かしこ 搜したるが、見えざりき。

に

雨 激しきに 出で 行きけり。

未だ 一月も たたざるに、かの 畫師は 突然 歸り來たれり。

問題13 次の「」に「を」を區別せよ。

(一)言はぬは 言ふに まさる。

(二)わざく 訪ひしに 不在なりき。

(三)友は 去りにき。

を

かくとは 思はざりしを、さても 嬉しき 心かな。

問題14 次の「十」を區別せよ。

(一) 苦しきを忍ぶ。

(二) 年なほ若きを、いかでさる任に堪へむ。

問題15 右の例文で「が」「に」「を」は、用言又は助動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

問題16 右の「が」「に」「を」の例文を口語に改めよ。

「が」に「を」は、いづれも用言及び助動詞の連體形に附いて、口語第二類の助詞「が」「の」「に」の意味に用ひる。

て

雨降りて、地固まる。 砲火をくゞつて、敵艦に迫る。

赤くて、大きなる花。

四海波静かにて、天が下穩かなり。

正行は、忠臣にて、且つ孝子なり。

問題17 右の例文で「て」は、用言のどんな活用形に附いてゐるか。

「て」は動詞の連用形(或はその音便の形)、形容詞の連用形「く」「しく」(或はその音便の形)、形容動詞の連用形「に」に附く。又、助動詞の連用形に附く。又、この「て」は次のやうにも用ひられる。

國に歸らんとて、出發せり。

昔、天竺に、祇園精舎とて、名高き寺ありき。

して

そもく、笠置の城と申すは、山高くして、白雲峯を埋め、谷深くして、萬丈の青岩道をさへぎる。

氣候溫和にして、産物豊かなり。

その勢、決然として、敢へて攻むべきやうもなし。

問題18 右の例文で「して」は、用言のどんな活用形に附いてゐるか。

「して」は、形容詞の連用形「く」「しく」、形容動詞の連用形「に」「と」に附

く。又、或る種の助動詞の連用形に附く。

て

寝もせで 夜を 明かしぬ。

病 快からで 困じぬ。

警戒も 嚴重ならで、 忽ちの うちに 攻略せり。

問題 19 右の例文で「で」は、用言のどんな活用形に附いてゐるか。

問題 20 右の例文を口語に改めよ。

「で」は動詞及び形容動詞の未然形、形容詞の未然形「から」に附く。又、助動詞の未然形に附く。助詞「て」に打消の意味が加つたもので、口語の「ないで」に當る。

つつ

讀みつつ 書く。

泣きつつ 語る。

問題 21 右の例文で「つつ」は、動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

問題 22 右の例文を口語に改めよ。

「つつ」は動詞及び或る種の助動詞の連用形に附いて、口語の「ながら」の意味に用ひる。

○なほ、「處」「間」のやうな名詞が、候文などでは第二類の助詞のやうに用ひられることがある。

久しく 病氣にて 引き籠り居り候處、 今回 全快 致し候間、 御安心 下されたく 儀。

〔八〕 この類の助詞は用言や助動詞に附いて、接續詞のやうに、上の語の意味を、下の用言又は用言に準ずるものに續けるものである。これを接續助詞といふことがある。

〔九〕 第三類

は

鯨は 魚には あらず。

も

美しくは見ゆれど、欲しとは覺えず。
知りてはあれど、言はぬなり。

いわれも知らず。

寒くもなし。

○老いも若きも喜ぶ。

右のやうに、「は」「も」は口語と格別の違ひはない。

ぞ

なごりなく散るぞめでたき。

風の音にぞ驚かれぬる。

さては汝のためにはよき相手ぞ。

などてかくはするぞ。

なむ(なん)

柿本人麻呂なむ歌の聖なりける。

や

花やとき、春やおそき。

ありやなしや。

杉野はいつこ、杉野はゐずや。

か

誰かある。

清盛などがへろく矢、何ほどのことか候べき。

かの扇を射落す者はなきか。

「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」が文の中にあつて、用言や助動詞がこれを受け
て文を結ぶ時は、必ずその連體形を用ひる。「ぞ」「なむ(なん)」は強く指
して言ふのに用ひ、「や」「か」は疑問の意味を表す。又「ぞ」「や」「か」は、文の
終りにも用ひる。「ぞ」は體言又は用言及び助動詞の連體形に、「や」は
用言及び助動詞の終止形に、「か」は用言及び助動詞の連體形に附く。
「や」「か」は又、反語を示す時がある。この場合には、「やは」「かは」となる

ことがある

空しく 月日をや(は) 過すべき

命をば かるきに なして、もののふの 道より 重き 道 あら

めやは

誰か(は) これに 感泣せざらむ

花は 盛りに、月は くま なきをのみ 見る ものかは

こそ

底ひ なき 淵やは 騒ぐ。山川の 浅き 瀬にこそ あだ波は 立

て。

汝は、聞きしにも 似ず 手こそ 荒けれ

「こそ」が文の中にあつて、用言や助動詞がこれを受けて文を結ぶ時は、必ずその已然形を用ひる。この「こそ」は、特に事物を取り立てて言ふのに用ひる。

右のやうに、「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」を受けて連體形で文を結び、「こそ」を受けて已然形で文を結ぶのを、**係結の法則**といふ。さうして、右のやうに用ひられる「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」「こそ」を係りの助詞といふことがある。

だに

塵 一つだに なし。

手にだに 取らず。

問題 23 右の例文を口語に改めよ。

すら

犬すら 恩を 知る。

見るにすら 目 くるる 心地す。

問題 24 右の例文を口語に改めよ。

右のやうに、「だに」「すら」は、口語の「さへ」「でも」などの意味に用ひ、軽いものを擧げて、それより重いものを推測させるのに用ひる。

さへ

雨降り、風さへ 吹きぬ。 残る 一人子にさへ 別れたり。
右のやうに、「さへ」は口語の「までも」の意味に用ひる。

し

花をし 見れば 物思ひも なし。
右のやうに、「し」は意味を強めるのに用ひる。

問題25 次の「し」を區別せよ。

(一) 咲かず なりにし 櫻。

(二) 時に 范蠡^{はんがい} なきにしも あらず。

問題26 次の「しか」を區別せよ。

(一) 海は 見えざりしか。

(二) 海こそ 見えざりしか。

のみ

かれのみ 喜ばざる はず なし。

残れるは これのみなり。

問題27 右の例文を口語に改めよ。

右のやうに、「のみ」は口語の「だけ」「ばかり」の意味に用ひる。

ばかり

月影ばかり 昔に 變らず。

義經 長刀を わきにかいはさみ、みかたの 船 二丈ばかり

離れたるに、ゆらりと 飛び移る。

右のやうに、「ばかり」は口語の「だけ」又は「ほど」の意味に用ひる。

まで

東京まで 行く。

など

繪など 描きて 遊ぶ。

家 貧しくして 苦しむなどは 世の 常の ことなり。

右のやうに、「まで」「など」は口語と格別の違ひはない。「まで」は動作・作用などの及ぶ限度を示し、「など」は例示するのに用ひる。

〔三〕 この類の助詞には、體言や用言、その他いろいろの語に附いて、副詞のやうに下の語にかゝつて行く用法がある。これを副助詞といふことがある。

〔三〕 第四類

な

ゆめ 忘るな。

いたく 罪 作りたまふな。

な…そ

な|行きそ。

な|忘れそ。

問題28 例文で「な」及び「な…そ」の「そ」は、動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

右のやうに、「な」「な…そ」は禁止の意味を表す。「な」は動詞及び或る種の助動詞の終止形に附く。但し、ラ變の動詞には、その連體形に附く。女々しくはあるな。

「な…そ」の「そ」は、動詞及び或る種の助動詞の連用形に附く。但し、カ變サ變の動詞には、その未然形に附く。

なこ(來)そ。

なせ(爲)そ。

ばや

七度まで 人間に 生まれて 朝敵を 滅さばや。

今 しばし 命 あらばや。

かきくらす あめりか人に 天つ日の かゞやく 邦の てぶり

見せばや。

問題29 右の例文で「ばや」は、どんな活用形に附いてゐるか。右のやうに、「ばや」は自己に關した事がらに就いての希望を表す。動詞及び或る種の助動詞の未然形に附く。

なむ(なん)

いま 一たびの 御幸^{みゆき} 待たなむ。

雲だにも 心 あらなむ。

もろこしも 天の 下にぞ ありと 聞く。 照る 日の 本を 忘

れざらなむ。

問題30 右の例文で「なむ(なん)」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

右のやうに、「なむ(なん)」は動詞形容詞及び或る種の助動詞の未然形に附く。他に對してあつらへ望む意味を表す。

○この「なむ(なん)」を係りの助詞として用ひる「なむ(なん)」と區別するため、願望の「なむ(なん)」といふことがある。

問題31 次の「なむ」を區別せよ。

(一) 歸らなむ。

(二) 歸りなむ。

(三) 夢のやうになむ。

がな

昔を 今に なす よしもがな。

右のやうに、「がな」は希望を表すもので、助詞「も」に附くことが多い。

かな

けなげなる をのこかな。

富士 ひとつ うづみ 残して 若葉かな。

あゝ、 悲しきかな。

右のやうに、「かな」は體言、又は用言及び助動詞の連體形に附いて感動の意味を表す。

○この「かな」は古くは「かも」と言つた。

かし

幸さい あれかしと 祈る。 來ても 見よかし。
右のやうに、「かし」は言ひ切つた形に附いて意味を強めるのに用ひる。

や

あな、嬉しや。

進めや、進め。

いでや、目に物見せむ。

いかに 梶原殿。この川は 西國一の 大川ぞや。

古池や、蛙かたが とびこむ水の音。

な

蟬の聲 聞けば 悲しな。

よ

少納言よ、香爐かき峰ほの雪は いかならむ。

その 芽の みづくしき 緑よ。

右のやうに、「や」「な」「よ」は共に感動の意味を表す。

〔三〕

この類の助詞は、體言や用言その他いろくくの語に付き、主として文の終りにあつて、疑問禁止詠歎感動などを表すものである。これを終助詞といふことがある。この類の助詞のうち、「な」「そ」「ばや」「なむ」「がな」「かし」などは、現代の文語では普通には用ひない。

問題 32 (イ)體言又は體言に準ずるものにだけ附く助詞には、どんなものがあるか。

のがあるか。

(ロ)用言や助動詞にだけ附く助詞には、どんなものがあるか。

問題 33 卷頭の「日本海海戦」の文章から助詞を抜き出せ。

問題 34 次の文に誤りがあつたら正せ。

(一)捨ておけば、ほどなく生き返らむ。

(二)楠木正成こそ第一の忠臣なりし。

(第二表) 口語及び文語形容詞活用表

例語	口語	
語幹		
未然		
連用		
終止		
連體	語	
假定		
命令		
種類	ク活用	文
例語		
語幹		
未然		
連用		
終止		語
連體		
已然		
命令		
種類	シク活用	
例語		
語幹		
未然		
連用		
終止		
連體		
已然		
命令		

(第三表) 口語及び文語形容動詞活用表

例語	口語	
語幹		
未然		
連用		
終止		
連體	語	
假定		
命令		
種類	ナリ活用	文
例語		
語幹		
未然		
連用		
終止		語
連體		
已然		
命令		
種類	タリ活用	
例語		
語幹		
未然		
連用		
終止		
連體		
已然		
命令		

のいなの化變形語	型 殊 特 型	種類
		語
		未然
		連用
		終止
		連體
		假定
		命令
		接
		續
		語
		未然
		連用
		終止
		連體
		已然
		命令
		接
		續

(第四表) 口語及び文語助動詞活用表

のいなの化變形語	型 殊 特	型 詞 動 容 形	型 詞 容 形	型 詞 動	種 類
					語
					未然
					連用
					終止
					連體
					假定
					命令
					接
					續
					語
					未然
					連用
					終止
					連體
					已然
					命令
					接
					續

(第四表) 口語及び文語助動詞活用表

口

語

文

語

(第五卷) 口舌及下文吾功助司安廣長

(第五表) 口語及び文語助動詞接続表

文 語	口 語	用 言	
		動詞	未然形
		詞形容	然形
		動詞	形
		詞形容	連用形
		動詞	形
		詞形容	終止形
		動詞	形
		詞形容	連體形
		動詞	形
		詞形容	已然形 假定形
		動詞	語
		詞形容	幹
		動詞	幹
		詞形容	以用外
		に言體	に言
		ノ助 カに詞	ノ助 に詞

(第六表) 口語及び文語助詞接續表

語 文				語 口				體 言 に
類 四 第	類 三 第	類 二 第	類 一 第	類 四 第	類 三 第	類 二 第	類 一 第	
								未 然 形
								終 止 形
								假 定 形

(第六表) 口語及び文語助詞接續表

教科書番號 21ノ二

昭和十九年二月一日印刷
昭和十九年二月五日發行
昭和十九年三月五日翻刻發行

著作權所有

著者發行

文部省

中等文法 二
定價金五十錢

昭和十九年二月七日
文部省檢査濟



翻刻者發行

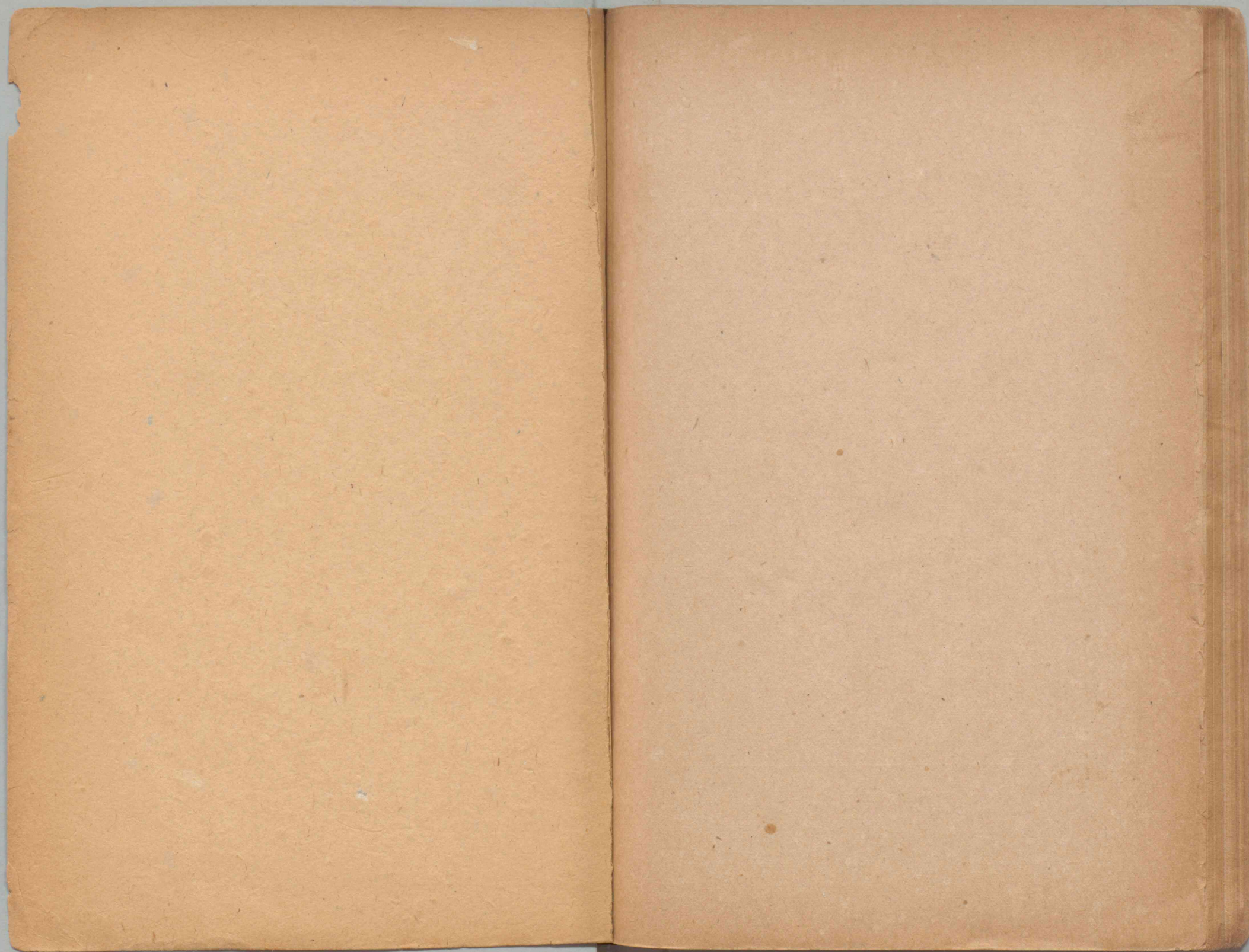
東京都神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治

印刷者

東京都小石川區西江戸町二十一番地
富士印刷株式會社
代表者 佐藤精亮

發行所

中等學校教科書株式會社



廣島縣立加計実業
男子部第二學年

佐口正男

広島大学図書

2000302314



庫
4
14